



読む前に

2012.1/3あたりに人気本四位ありがとうございましたっ。

基本的なことを書いてますが、あえて小説で触れていな部分をば。

Q・口が悪い人がたまにいるが誰か。

A・黒い翼の、本と鎌を持っていないうちの三人のどれかです。本と鎌の人は、基本的に丁寧口調。

Q・「お黙り!!!」を毎回いう理由。

A・決まり文句です。ついでにいうと裁判を始めます。も決まり文句です。

Q・ジャッジメントの白と黒の本の書かれ方。

A・何かその場のノリで書いてます。時々寝ながら考えています。

Q・6で出てくる黒い翼の男はロリコン？

A・notロリコン!!

天秤で羽を乗せるとなったら→エジプト方面の裁判方法

白い翼の女→天使系

黒い翼の男→悪魔系

神様を信仰しているマイキのことを「偶像崇拜」と言っているので、神様なしの世界設定です。だって全世界の神様集めると愉快的なことになってしまうんですもの。

と、いうのを前提でお願いします。

1.裁判-孤独なマイキ-

典型的善人の例。

死因・事故

2.裁判-早苗、奈々子、悠木-

男女のもつれのせいで引き起こしたヤンデレ的な話。

死因・他殺、自殺

3.裁判-英雄テフィルス-

英雄として神の加護を受けたというテフィルス。しかし神は存在しない。

死因・病死

4.裁判-物書きシリーズ-

物書きの彼は借金を抱え、妻子と別れて自殺した。

死因・自殺

5.裁判-魔女アフェルタ-

魔女裁判で処刑された、アフェルタ。人間の裁判と死後の裁判。

死因・火あぶり

6.裁判-無垢な子供サニャ-

八歳のサニヤは、義母による虐待を受けていた。全て自分が悪いのだといわれて。

死因・虐待

7.裁判-電子の人間正行-

羨ましかった。だからネットで誹謗中傷を書き込んだ。相手のことなんて何も知らないから、気軽に出来た。

死因・事故

8.裁判-約束と裏ぎりの辰之助-

辰之助は第二次世界大戦、生き延びるために仲間を食ったことを言えず、家族に見守られて老衰した。

死因・老衰

9.裁判-復讐者シリフ-

殺すか殺されるか。壊滅しかける国を救うため、医師のシリフは英雄を殺した。

死因・事故

10.裁判-作者香吾悠理-

これで最後になります。

死因・死んでない

ジャッジメント1-7に出てくる人たちのセリフと影絵



本にしたいけど、ページ数えたら、コストがかかりまくったので、やめました。

2012.4/17完結

1.裁判-孤独なマイキ-

女は三十年間神を崇拜し、薬を作っては、体の弱い者へ配り続けた。

女の名前はマイキという。

生きるために沢山の動物を殺した。

時に人を裏切ったこともある。

さて、彼女は死を迎えた。

いつもの様に薬の材料をとっていた時、足を滑らせて崖の下へ転落した。

この世界の裁判の仕方を教えよう。

マイキは裁判所にいた。

押しつぶされそうなほど暗い場所、目の前には、一体何メートルあるか分からない黄金の天秤がある。

見回してみると、右手に白い扉、左手に黒い扉。天秤を囲むように、男と女がいた。

白い鳥の様な翼の生えた女が四人、白い扉の前に。

黒い蝙蝠のような翼が生えた男が四人、黒い扉の前に。

天秤の上には黒い翼の生えた大きな鎌を持った男、その隣に、見たこともないほど大きな羽を持っている白い翼の生えた女。

マイキはここが死後の裁判所だと気付いた。

「裁判を始めます」

天秤の上の二人が同時に喋る。

黒い翼の四人のうち一人は黒い本を持っていて、その本にはマイキの名前が記されていた。

「名はマイキ=ベル。人間を一人殺しています」

その言葉に、マイキが震えあがった。

天秤の前に座り込むと、手を組んで膝をついた。

「母親を一人、マイキが生まれた際、出産によって死んでいます」

マイキはずっと孤独だった。

マイキは村で愛された女性だったが、両親はいなかった。父親はマイキが生まれる前に死亡、母親はマイキを生んだ際の出血多量により死亡。

「殺した生物の数は七千と百七十。更に仲間を三人裏切っている。地獄へ落としてもよいと思われる」

「そもそも人間は罪深すぎる、全て地獄へ落とすべきだと...」

その言葉に待ったをかけたのは、白い本を持った白い翼の女。

「ではマイキの行動を述べます」

透き通った声が響く。マイキがなすすべもなく、手を組んで震えている。

冷たい床の感触しか感じない。

「マイキは大変神への信仰が強く、薬を作っては配っていた。その薬によって救われた人間は最低でも三十。マイキは人望熱い女性です」

「偶像崇拜ではないか。薬だってそれによって摘み取られた草は数え切れない。殺した生物も先ほど述べたとおりだ」

天秤の上の黒い翼の男が口をはさむ。

「お黙り！では続けなさい」

その隣の羽をもった女が一喝する。

「無意味な惨殺はしていません。全て食べるために殺しています。このマイキという女は天へ行かせるべきです」

「素晴らしい人間ではないか！」

女たちが感心しているが、男たちはそれに対して異議を唱える。

「人間を裏切っている、この女が生きてさえいなければ死んでいなかった生物の数は！」

「肉を食べず、虫や花をあやまって踏みつぶさない人間などいるのでしょうか」

マイキは彼らのやり取りを聞きながら、震えている。

「どう思いますか？」

天秤の上の二人がやり取りをする。

この二人が、善悪を決める重要な人物なのだろう。

「偶像崇拜とは愚かだ。生まれながらに母を殺すとは何て罪深い」

「いいえ、信仰心は必要です。生まれて母を亡くしたのは、事故ではありませんか」

「地獄へ落とすべき、輪廻などさせない」

「天へ行かせるべき。輪廻もさせるべき」

意見は五分五分、どちらも譲らない。

ついに痺れを切らせた白い本を持った女は、マイキに向けて言葉を発した。

「マイキ、そちらのいい分を述べなさい」

割れたスタンドグラスで見たことのある天使に似ていると、マイキは思い、白い翼の生えた女たちに向けて座り直した。

「わ...、私は確かに友人を裏切ったことがあり、母は私のせいで死にました。ですが...、それを償うために、病気の人には薬を、食べるのに困った人には食料を分けました...」

震えた声で、述べて涙を流す。

後ろにいる黒い翼の男たちがせせら笑う。

「人間の好きな偽善ではないのか」

「裏切りを償うことができるのか？」

本を持った女は、それを聞いて、頷いた。

「確かにマイキの慈悲によって助けられた人物は多く、薬も非合法ではない。人間の世界でも私たちの価値観でも善です」

天秤の上の女は、持っている羽を片方の天秤に載せた。

ギギ、と派手な音を立てて天秤が傾く。

「この羽より罪が軽ければ天へ、重ければ地獄へ落ちます。それぞれ、本をこの上に乗せなさい」

二人は同時に喋り、本を持った男と女は同時に天秤の上に本を置いた。

マイキはそれを涙を浮かべ、震えだした。

天秤は、と音を立てると、そのうち止まる。

羽より本は重さを示さず、天への道を示した。

マイキは善と判断された。

「天へ向かいなさい、マイキ。では案内なさい、あなたたち」

天秤の上にいる女は、白い扉の方にいる彼女たちに案内される白い扉が開けられ、その先に白い花が咲き乱れる園が広がっていた。

「あ、ああ、ありがとうございます、これが本で読んだ天の園なのですね」

マイキはぽろぽろと涙をこぼし、彼女たちに促され、園へ踏み入れた。

終

2.裁判-早苗、奈々子、悠木-

男は、いつも遊び呆けていました。仲間を利用しては蹴落とし、のし上がり、ついに財産を手にした。

そんな男にも愛する女が出来た。一時愛しては捨てを繰り返した男の愛する相手は、結婚すればなお権力と財産を手に入れることのできると見込んだ女だった。

二人は結婚を約束し、女は白いドレスを作り、結婚まで指折り数える。

きっと二人なら幸せ、そう信じ続ける女は手を何度も怪我しながら、一生懸命ドレスを作り続ける。

幸せな生活が始まると女は喜んで、招待状を出し、大きな教会で着るためのドレスを作り続ける。

しかし男は約束を破った。

結婚直前、若い女と一緒に逃げる約束をした。

女は出来上がった白いドレスを着て、その事実には嘆き悲しんだ。

男は別の女と手を取り、逃げようと駆け出す。

女はナイフを握りしめて、その二人が落ち合う場所へ向かう。

男が遅れて着いたころには悲惨な光景が広がっていた。

ドレスを着た女は死んだ目をして、ドレスを赤く染めていた。傍らには逃げる予定の女、切り刻まれて元々美しかった顔は、肉が見え、皮がない。

男は思わず吐いた。

女は男を刺し殺すと、自分の喉もさし貫いた。

次の裁判です。

扉が開かれた。

裁判所では、白い翼の生えた女が四人、白い扉の前に。

黒い翼の生えた男が四人、黒い扉の前に。

凍てつくほどの空気の中、三人は天秤の前に導かれた。

巨大な黄金の天秤の上、白い翼の女が立っている。大きな羽を手にし、隣には黒い翼の生えた男が鎌を持っていた。

三人は、生きていたころの姿で導かれた。

若い女は切り刻まれる前の綺麗な顔、ナイフを持っていた女は真っ赤なドレス、男もいる。

「裁判を始めます」

「嫌、何ここ、何が始まるの!？」

若い女が空気におびえ、逃げようとするが、足が動かない。何とかもがくが、そのうち彼女を男

たちが囲んだ。

赤いドレスの女は、黙って座りこむ。

男はただ、目の前の巨大な天秤を眺めていた。

男のうち一人が黒い本を三冊持っている。そのうち一冊を開くと、口をあけた。

「その女を捕らえなさい。ではその女の方を。名前は...、時織早苗、年齢は十七...、出身地は東洋。間違いないですね」

全員の視線が彼女に集中する。

早苗はおびえながら首を縦に振った。

「死亡原因は、出身地が同じ渋谷奈々子にナイフで三十箇所刺された」

「何と可哀想な」

白い翼の女は呟いた。

「いやっ、なんなのよここ！」

彼女は泣き叫び、恐怖に顔を歪める。

裁判所に響き渡る悲鳴。

「お黙り」

天秤の上の白い翼の女が一喝すると、黙り込んだ。

「では続けます。早苗の罪はとても重い。渋谷奈々子の婚約者と駆け落ちをしようとした。殺した生物の数は一万ほど。六歳のとき、奈々子の大事にしていた犬を殺しています」

その言葉に、赤いドレスの女は、ゆっくり振り返る。

「...あれは貴女だったの...」

しかし顔は真っ白で、怒りを露にしていない。

早苗は何度も首を横に振る。

「嘘、嘘、だって死ぬなんて思わなかったの...、彼をとられたのが悔しかっただけ、私、死ぬなんて...」

弁解する早苗を見下ろし、鎌を持った男は鬱陶しそうに眉をしかめた。

「うるさい女だな。続けろ」

「はい。いたずらに生物を殺していています、裏切った人間の数は十三」

それに待ったを言ったのは白い翼の女、白い本を三冊持っていて、そのうち一冊を開いた。

「人間は過ちを繰り返して成長します、彼女は殺す気がなかった。両親をととても大事にされていて、特に病のある母のために家事をすべてこなしていました。彼女に罪はない」

「それならばこちらは、地獄に落とすべきだと思います。泉悠木の言葉に耳を貸し、結婚の約束を知らながら奈々子を裏切った。輪廻させるべきではない」

やはり話は進まず、しばらく本を持った男と女は無罪有罪で喧嘩をし始めた。

天秤の上の二人は、顔を見合わせると、頷く。

「では裁判を。残り二人がいますので手短にします。本を天秤に乗せなさい」

そういった白い翼の女は持っていた巨大な羽を乗せる。ギ、と音を立てて天秤が傾いた。

本が乗ると、一気に本を乗せた天秤は傾いた。

「やはり裏切りが強いかと思います」

「では地獄へ？」

傾いた天秤を眺め、白い翼の女たちは相談をする。

「ですが、殺されたという点では、彼女だけに非があるわけではないと思います。せめて輪廻だけは」

その言葉に周りの皆が頷いた。

「では地獄へ。罪の分だけの痛みを味わったのなら、魂と罪を浄化して輪廻に」
鎌を持った男が頷いた。

判決を言い渡された早苗は、黒い扉へ導かれる。

黒い扉の向こうには煮えたぎる血のような色、そこでおぼれ焼かれ苦しむ罪人たち。
それを見た早苗は悲鳴を上げ、逃げ出そうとしたが、黒い翼の男たちがつき落とす。
そして扉は閉じられた。

羽を天秤から拾い上げ、本は無くなる。すると傾いた天秤は音を立てて並行に戻った。

「この二人は？」

「女の方は先ほどの女を殺した渋谷奈々子。男の方は泉悠木。年齢は同じで二十三」
読み上げるのは黒い本を持った男。

名前を告げられた男の方は、はっと周りを見渡した。扉の向こうを見た男は、急に震えだした。

「最初に男の方。悠木は最大の裏切りをしております。奈々子と婚約しながら、早苗と逃げ出しました。今まで殺した生物の数は二万と五千。今まで裏切った数は五十を超えます、数々の女に手を出しては裏切っています。更に両親と兄弟、仲間も裏切り続けている」

男が読み上げた後、白い本を手にした女は、本を開いてため息をついた。

読みあげようにも、何も書かれていなかったからだ。

「どうしようもない、何も書かれていません」

白い翼の女は、困って首をかしげた。

それを聞いた男たちは、ゲラゲラと笑いだした

「清々しいまでに罪にまみれた人間だ!!」

「計るまでもないが、地獄へ連れて行く前に是非を聞きたい」

白い翼の女は何も言わず、首を振る。天秤の上で羽をもった女も、ため息をつくど、同意を示した。

男を引っ張って黒い扉へと連れていこうとするが、その男の腕を引いて止めたのは、赤いドレスの女だった。

「悠木は私を裏切っただなんて思ってないの...」

それを見た黒い翼の男たちは苦笑した。

奈々子は悠木の手を離そうとしない。

「連れていくなら一緒に落として、一緒にいたい...」

「彼女が言うなら、一緒に裁判を言い渡すのがいいと思うのですが」

何も書かれていない、泉悠木の名前が書かれた本を投げ捨てた白い翼の女は、残り一冊を広くと、天秤の上の二人に提案する。

「皆の意見を聞こう」

「私も同意です」

「面白い、ではその方向で行こう」

泉悠木を奈々子の後ろに座らせると、次は奈々子の裁判が始まった。

黒い本をあけると、淡々と告げる。

「この際なので、殺した生物は無視します。もっとも彼女のも罪深いところは、二人を手にかけてことです。惨い殺害方法であり、輪廻をさせるべきではないと」

やはりそこで待ったが出る。本を開いた女だ。

「彼女は裏切られた。当然の報いではないのでしょうか、悠木と早苗の二人は。しかし殺害については、何も言えません。地獄へ落としたとしても、彼女については輪廻をさせるべき」

「有罪？無罪？有罪にしても、輪廻をさせるべか？」

「輪廻はさせるべき、しかし悠木の方は輪廻はさせるべきではない」

白い翼の女たちは、地獄行きを決定したが、輪廻の提案をする。

「輪廻はさせるべきではない」

黒い男たちは、輪廻など却下したが、そこに奈々子の声が入る。

「嫌、一緒にいたい、輪廻なんていいわ。彼の行くところにずっといさせてほしいの」
それを見た全員は、やはり顔を見合わせた。

羽を手にした女は、鎌を持つ男と軽く相談をすると、頷いた。

「では、奈々子にせめてもの慈悲として、悠木と永遠に地獄へ落とします。良いですね？」

それを聞いた悠木は叫んだ。

「嫌だー!!あんなところに落とされるなんて、嫌だ、殺したのは奈々子なんだ!!俺は悪くないんだ!!」

暴れて叫び、奈々子の手を振り払う。しかし奈々子は爪を立てて悠木の腕をつかんだ。

暴れる悠木を、彼らは抑え込む。

白い翼の女たちはそのまま、奈々子を黒い扉へ連れて行く。悠木は何度も叫んで無罪を主張したが、捨てられた本には一切の善行が書かれていない。

二人を一緒に扉の向こうへ突き落とす。

真っ赤に煮えたぎる。むせかえる血の匂い。二人は一緒につき落とされる。

奈々子は熱さに叫び声を上げる悠木にしがみついて、嬉しそうに笑った。

「ああ、悠木、私と一緒になのね...嬉しいわ、輪廻なんかなくていいから、ずっと一緒にいたかったの...」

それらを見届けると、黒い扉は閉じられる。

これが彼女の幸せだったのかもしれない。

終

3.裁判-英雄テフィルス-

英雄と呼ばれた男は、沢山の軍隊を指揮し、先陣を切って闘い続けた。
土埃のふく貧しい国は他国に侵略され、領土をとられかけていた。
彼は戦い続けた。何度も怪我を負いながら、国のために闘い続けた。
自分の国を守り抜き、他国へ侵略をし、勝ち続け、ついに国は独立することができた。
しかし戦いの際の傷が原因で、皆に惜しまれながらこの世を去ることになった。

英雄テフィルスの裁判である。

「裁判を始めます」

巨大な金の天秤、両サイドには扉が各一つずつ。黒い扉の前には黒い翼の男、白い扉の前には白い翼の女。

天秤の上には羽をもった女と、鎌を持った男。

扉の前の男が黒い本を開き、天秤の前に立つ英雄の名前を挙げた。

「名はテフィルス＝ハルゼイン。年齢は二十七」

ここはどこだ、と、テフィルスはあたりを見渡す。

巨大な天秤を前に、初めて恐れをいだいた。

「国のために犠牲を出し、間接的にも殺した生物の数は大規模、七十万を越す」

「英雄気取りか」

本を持つ男の隣で黒い翼の男が笑った。

「お黙り、続けなさい」

天秤の上の白い羽をもった女は一喝する。

天秤の上の二人は絶対的な存在らしい。

昔読んだ本では、死者には裁判があるということを知っていたテフィルスは、聖騎士として王の前に膝まづくように、天秤の前で敬意を示した。

「たった一つの国のためだけに多くの血を流した罪は深い。ここに一時期死者が多く訪れたのもテフィルスによって死んだ者たちだろう」

その言葉に、テフィルスは本を持った男を見た。

「私のやっていることが間違っていたと...!？」

動揺する彼を見ながら、今度は白い本の女が読み上げる。

本にはずらりと文字が並んでいた。

「これは全て読み上げるのは大変ですね。テフィルスは国を守った、まさに英雄と言えます。カリスマ性と騎士としての素質を持ち、国を独立させた男です。軍隊を率いて積極的に戦い、弱った兵への心遣いも忘れていなかった模様。彼がいなかったら、国はここに存在していないでしょう」

その言葉に、黒い本の男が険しい表情をした。

「それによって沢山の命が奪われた。英雄といえどここではただの人間、殺した生物は莫大すぎる。自ら策を練って出陣し、街を焼いて罪のない人間たちを地獄へ落とした」

「それもそうだな」

テフィルスは、やはり動揺したが、また座り込んだ。

腰に携えた聖なる剣は、神の加護を受けているという。

それを国王直々に頂き、その剣を以って闘い続けた。

白いマントを翻し、銀色の鎧を身につけ、戦い続けた。国のために。

「いいえ、彼がいなければさらに多くの血が流れていたことでしょう。彼は最小限に戦争をとどめたのです」

白い翼の女が対抗する。

テフィルスは彼らの威圧感に圧倒されながら、凜とした声で鞘に入った剣を手に乗せた。

「この剣は神の加護を受けています。多くの犠牲者を出したことも事実、街が焼かれたのも事実、しかし私は出来る限りのことをやりました。神の意志に従い、我が国を救い出しました」

その剣を手にとると、黒い翼の男はまじまじと見つめた。

柄の部分に宝石が細工されている、非常に美しい剣だ。

鞘にも紋章が描かれてある。

「また偶像崇拜して心酔した結果か」

男の言葉に、う、と、小さく漏らした。

「私は聖騎士として、神の加護を受けたものとして闘った次第」

「神は全世界にいくつあるか知っているか。あんなに沢山の神がいたら天国も地獄も死者より神様であふれちゃうね」

その言葉に黒い翼の男たちは頷く。

黒い翼の男に向けて、今度は白い翼の女がふっかける。

「偶像とはいえ、信仰する気持ちに変わりはないではないですか。今回の件は非常に裁判に困ります。テフィルスは大変優秀な人材です。国を守り、まじめな性格であり、慈悲を持った人間である」

「だがくだらない戦争で命を落とした数が多い。テフィルスは自分を正当化して殺しを続けただけだ。慈悲を持つのも国のものだけ、他国には容赦ないといわれている」

今度は黒い本のページをめくり、話を続けた。

「他国から見たテフィルスの評価。領地を奪い金品を絞り上げ、国で英雄といわれていても、ここでは鬼印。テフィルスの死を喜ぶものは多い。やはり地獄へ突き落すべきだ」

「国から見た評価は高いが、他国からの評価は低い、と」

鎌を持った男は低音でテフィルスに自分のいい分を促した。

緊迫した空気。

このような英雄様が現れるたびに裁判は難航する。

テフィルスは 悪魔のような翼の生えた男が神の加護を与えられたという剣を平気で持っていることに驚いていた。

あの剣は神の加護の熱いものにしか持てないはずである。

それに気付いた黒い翼の男は剣を眺め、そのあとテフィルスを見つめた。

「これはただの剣だ。特殊な彫り込みをして、形だけの儀式をした、ただの剣だ」

「そ、んな。馬鹿な、神はどこへ？神の啓示を受けた聖女と共に私たちはつきすすんだ、国を守った。神の名のもとに私は」

「だから、神は人間の作り上げた偶像だ。実際には存在すらしない」

それを聞いたテフィルスは、泣き崩れた。

白い翼の生えた女たちを見上げると、すがるように膝まづいたまま、肯定してほしいと訴える。

「残念ながら、彼らのいうとおりです。各国にあるという神は存在しません」

女は憐れみを持った目で、テフィルスを見て、息をついた。

テフィルスは声をあげて顔を覆った。

聖騎士として闘い続け、生涯をささげた彼にとってはあまりにも非情な現実だった。

「私は騙されていたのか？そして罪のない人間を殺していたのでしょうか。国の未来のためとしていたことが、ただの大量虐殺だった。私は、他国からでは悪魔のような存在だったと…」

泣き崩れるテフィルスは、罪の意識と後悔にさいなまれた。

「では、本を天秤へ。これによってあなたの罪が確定されます」

天秤の上にいた女は、大きな羽を天秤の上に置いた。

同時に本が置かれ、大きく天秤が揺れた。

テフィルスは涙にぬれた顔で、それを眺めた。

ギ、ギ、と大きく揺れ続ける。

しかしどうも天秤は安定する様子はない。

「これは一体どういうことか」

鎌を持った男は、不思議そうに地に降りて眺めた。

「これは、以前にもありましたね。実際には罪も大きいですが、今罪の意識を感じ取った天秤は、判決できない状態でしょう」

やがて並行になった天秤は、時折ぐらぐらと揺れた。

どうするべきか。

相談し合う男と女。

しかし結論は出ない。

天秤も安定を見せず、裁判は長引いた。

そこで、泣き続けたテフィルスは顔をあげた。

「私に選択をさせていただけませんか」

テフィルスは大きな決意を胸に示した。

皆の視線がテフィルスに集中する。

その合間にも天秤は大きく音を立ててぐらぐら揺れ続けた。

「では言ってみなさい」

「では言うがいい」

天秤の上に女と、鎌を持った男は同時にテフィルスに言う。

テフィルスは神にしてきたように膝まづき、涙を拭くと、一礼した。

「私は大変罪深い人間、国のためと行っていたことは、確かに他国から見れば悪魔にひとしい。存在しない神の啓示に従っていた私は」

胸についた聖騎士の証の紋章を破りすれた。

剣を黒い翼の男から受け取る。剣を鞘の床につき、剣を抱く形で、選択をした。

「私は、地獄を選び、永久罪を償い続けます。しかしわがままをお許してください」
ほう、と、全員が感心し、テフィルスを眺めた。

「きっとこの先も、私についてきた者たちがここに来ることでしょう。しかしお願いします。彼らをお許してください、彼らは私に踊らされただけなのです。私が永久に償い続けます、彼らの分まで。彼らの罪は軽くしてください。私はずっと罪を胸に抱き、どんな苦痛にも耐え続けます」

「なるほど、聖騎士として他のものたちの分まで罪を受けるといえるのですね」

白い本を手にしていた女は、手元にあった羊皮紙に何かをつづった。

女は天秤の上の女を見上げた。

「潔い青年である、ここは天へ行かせたいところですが、その願いを引き受けましょう。貴方は永遠に業火に焼かれ続けることになるが、本当にそれでいいのか？」

白い翼をはためかせ、揺れる天秤の上にある、羽と本を取り上げた。

カクン、と音を立てて天秤は動いた。

水平になった天秤を見ると、鎌を持った男は、テフィルスに言い渡した。

「地獄へ案内しろ。ただしテフィルスには慈悲を渡す」

鎌を持った男は、膝まづくテフィルスの首をめがけ、鎌を振りおろした。

ごとんとテフィルスの首が落ちる。

「これで痛みは感じない。だが罪を償うために地獄へ落とす」

テフィルスは、体と首が離れた状態になったが、血が噴き出すことはなく、最後に小さく呟いた。

「ありがとう、ございます」

その首と体を抱えると、黒い扉を開く。

血の海の中へと落ち行き、姿が見えなくなった。煮えたぎる海の底はもっとも罪深い人間が落とされる場所であるが、鎌によって痛みは感じない。

「人間とは不思議なものだ、他人の分まで全ての罪を引き受け、自ら地獄を選ぶとは」

黒い翼の彼らが扉を閉めた。

「テフィルスの遺言は確かに引き受けました。人間は罪深い生き物であり、同時に慈悲深い生き物であるのです」

羽をもった女はそれだけ告げると、次の裁判が始まった。

終。

4.裁判-物書きリージ-

男は真面目に暮らしてきた。

そして小さな家庭を築いた。

可愛い子供が出来て、男は幸せだった。

妻と子供、三人で一緒に生きるものだと思っていた。

働いても働いても暮らしは変わらず、借金の肩代わりをさせられて、妻と子に逃げられた。

心がいない、趣味で続けていた未発表の小説は遺言となり、男は一人小さな部屋で首をつる。

せめて貯金だけは、死ぬ前に妻と子に。

突然自分の家の前に、別れた夫から少しでもお金があればびっくりするだろうな。

男は少し微笑んで、椅子を蹴り飛ばした。

世は不況、世は食糧不足、世は自然災害の嵐、世は自殺者が増える一方。

裁判を始めます。

足を踏み入れた先は、白い羽の女が白い扉の前に四人、一人は白い本を持っている。

黒い翼の男が黒い翼の前に四人、そのうち一人は黒い本を持っている。

巨大な黄金の上には、鎌を持った黒い翼の男と、白い羽をもった白い翼の女。

男は小説の中に迷い込んだのだろうか、と、高い天井を見上げた。

不思議と怖くない。

「では、始めます。名前はリージ=ミリアス、年齢は五十七」

黒い本を読みあげる。

キョロキョロとリージはあたりを見回した。

「彼は人を一人殺しています。殺してきた生物の数は十万。食料のほかに、いたずらに生物を殺しています。ここに載っているのもおかしなことですが、人がよすぎたせいで他人の借金の肩代わりをして自滅した模様。死因は自殺です」

その言葉に、リージは首をかしげた。

「人を？」

殺した覚えはないが、と、ただそこに突っ立って、告げられる罪を聞いていた。

「裏切りの数は...三人、家庭崩壊を招いたせいで、リージの身内の生活が大変なことになっているようです」

「勝手に自滅して勝手に周りを巻き込むとは、なんて迷惑な奴なんだ」

黒い翼の男がぼそぼそと悪態をついた。

「お黙り、続けなさい」

羽をもった天秤の上の女に促されて、今度は白い本を持った女が読み上げた。

「...おや、こちらにも同じことが書かれています。借金の肩代わりをした、優しすぎる人物だったと。それゆえに自滅したようです。平凡な人生を歩んできた模様、いたずらに殺した生物には

墓をつくる程度の優しさはあります。ただ、周りを巻き込んだせいも、ここから先は白紙です」本を閉じると、女はため息をついた。

「天秤で計らなくてもこれは地獄ではないのだろうか」

黒い翼の男が話します。

リージは目の前の巨大な天秤を見ては、好奇心に駆られていた。

周りは天使か悪魔か。

「おお、あなたたちが天使と悪魔か？初めてだ、これで一つは小説が書けてしまうな！」

リージは喜びに満ちた声で、相談しあう彼らを見た。

今何が行われているのか、リージは理解できていないようだ。

「...、まあいい、巻き込まれた人間は？」

少し呆れて、羽をもった女が黒い本の男に聞く。

「はい、離婚する前の妻と子、あと一人は...、？おかしいですね、もう一人の名前が載っていません」

「？」

首をかしげる男に、白い翼の女が口をはさむ。

「お待ちください。おかしいです」

ぺらぺらとめくられる本には、次々と勝手に文字が連なる。

先程白紙だった所はインクで真っ黒になり、ページが勝手にめくられては記載されていく。

「素晴らしい、幻想的だ！この天秤はなんという？羽の生えたあなたたちをモチーフに、小説を書いてもいいだろうか！」

リージは目の前の天秤に感激しているようだった。

金色で、巨大な天秤は、リージにとって不思議で偉大な存在に映るようだ。

しかしなんていう能天気。

天秤の上にいる羽をもった女は、リージを一喝する。

しかしリージは目を輝かせ、落ち着かない。

「...お黙り!!して、何が書かれている？追加されたことを述べよ」

白い翼の女が、次々と書かれていく文字に目をやりながら、何とかして元のページに戻ろうとする。

しかし黒い翼の男が述べた。

「いたずらに命を奪った数があまりにも多すぎます。食べるためや生きるためではなく、好奇心による殺戮、命を奪ったことに変わりはありません」

ふむ、と皆は頷いた。その間にも勝手にページは白い本に記載されていく。

「リージ、なぜに好奇心で殺した？たとえ小さな虫であろうと、命は命、言い逃れをしてみたいならして見せるがいい」

黒い翼の鎌を持った男が、リージに向かって問いかけた。

リージは、軽く頷くと、背をまっすぐ伸ばし、ありのままを伝えた。

「もちろん!!小説のためです。死ぬ時はどんな様子か、ずっと小さいころから見て痛かった。わざ

と蟻を蜘蛛の巣に引っ掛けて、蜘蛛がそれを食べていく様子を見るため。アレ？これって裁判？」

堂々と発したその言葉に、皆は呆れかえって、あるものは笑い、あるものは顔を覆い、あるものは目をそらせた。

「裁判ならどうどうと言え、私は趣味で小説を書いていた。ほら、だって医学だってそうでしょう。マウスやモルモットや兎を殺して医学を発展させる。小説だってリアリティを出すために、どんなふうにも血を流すか、それを」

突然黒い本を持った男が笑いはじめた。

皆の視線が男に集中する。

「いやあ、笑わせてもらった、言い訳しないで堂々と罪状を述べる。お、っと、罪状が増えたぞ。何、やはり罪悪感がないらしい」

黒い本にもすらすらと文字が書かれていく。

白い翼の女たちも、あまりにもストレートに罪の意識のなさに、少々嫌な表情をしている。

「ふむ...、しかしもう一人の裏切りが気になるな」

「少し、よろしいでしょうか。本が止まらないのです。この世界と彼らの住んでいた世界とは時間が極端に違うせいでしょうか」

白い本を持った女は、書かれ続ける文字を一生懸命見ながら、何とかして止めようと試みるが、今までにない早さで書きつづられる内容に、困り果てて本をそのままにさせた。

「所で、私が殺した一人とは？動物なら確かに沢山殺しました。実験とはいえ、すまないことをしたと思っています。しかし人体実験はしたことがない」

ああ、と黒い本を持った男がページを最初の方へめくった。

黒い本には、ただ一人の名前が書かれていた。

「リージが殺したのはリージ、つまり自分自身を殺したことが罪だ」

自殺が罪。

「はあ。自分自身を殺した、確かに。面白い解釈ですね！ここに紙とペンはないですか、メモでもいいので」

リージは自分のポケットをまさぐるが、ペンと紙は見つからない。

まさか彼らの持っている本に書くわけにもいかない。

「何を書くのですか」

女が言う。

「自分自身を殺すことが罪というのが面白いので、メモしておきたいんですよ」

「...」

女は絶句する。

男は笑いを必死にこらえている。

天秤の上の羽をもった女は、今までにないお気楽な性格の男に、何もいえず凝視している。

「!!失礼、見逃しているものがありました。リージは、妻子に少量ながら死ぬ前に金銭を残しているようです」

ほう、と、今度は感心した声が上がった。

女はそれを聞いて、クスクス笑いながら天秤の上の二人に向かって言う。

「彼に罪の意識はないのはいかがでしょうかと思いますが、基本的に善人の様です。私はそう判断しました。天秤にかけてはいかがですか？」

「そうですね、では本を乗せなさい」

黒い翼の男は、本を乗せる。しかし白い本は、まだまだ書かれることが止まらない。

一体何だと女は困り果てて、次々にめくられていく本の扱いに困り果てた。

それから五分ほどした時、やっとぴたりとやんだ。

本は、びっしりと善行が書かれていた。しかもそれは、彼が死んだ後の行いのようだった。

「では天秤に」

白い羽を天秤に載せようとする女に、本を持った女は、ページをめくり、驚いて声をあげた。

「...、お待ちください、今本に新たに書き足されたことを述べます。リージの残した作品が、世に感動をもたらしているとのこと。救われた人間の数が、更新されていきます。現時点で全世界に。どうやら、残した作品が本になり、世界で人気になっているようです」

それを聞いたリージは、驚いて彼女の手をとった。本に書かれている内容を眺めると、リージには読めない字で、確かに書かれている。

「何と！私の小説が!?一体それどういうことですか」

「そちらの本に、裏切りの人物が一人書かれていませんか？」

女は、黒い本を乗せた男に向けて言う。べら、と天秤の上の黒い本はめくれ、やはり何かを書きたされたようである。

男はそれを確認する。

「裏切り、の人物が書きたされています。これはなんだ？リージを嫌っていた人間の様だ...」

「はい、その人物と、元妻がリージの遺品整理の際、リージの遺作であるそれを見て、本にすると決意したようです。先程本が止まらず書き続けていたのはそれに対する評価だそうです」

リージはその言葉を聞いて、天秤の前に立つと、大きく手を広げた。

「それは本当ですか！私の作品が世に出たと！おお、それならばその本は誰に対して印税が入りますか、妻と子に苦労はなくなりますか!？」

「そのようですね」

リージは胸の前で手を組んだ。そして座ると、嬉しさのあまりに涙を流す。

白い本には、リージのヒューマンドラマやファンタジックな内容に、胸を打たれたと、つぶられている。

「妻よ、子よ、皆に感謝します！灰色の世界に少しでも光させば、と書き続けていたもの。少しでもこの世界に明るいものが見いだせるようにと書き続けた、しかし私にその資格はないと思っていた。だが、だが、今それが今叶った！ありがとう、死後にこんなにも嬉しいことがきけるとは。これでもう思い残すことは一切ない！」

長く書きつづられた白い本を読みあげるのには苦労しそうだ。

仕方なく、白い本を羽をもった女に渡すと、その本を見た女と、隣の鎌を持った男は、驚いて声

をあげた。

「これは…」

めくってもめくっても書かれているのは、称賛の嵐。

何ということか、ここまで人を変えたとある文字がつづられた本は見たことがない。

「リージ、先ほど自身のために殺したと言っていたな」

鎌を持った男は、鎌を持ったまま、地に降りた。

鎌を向け、リージに告げる。

「自身の作品のためとはいえ、殺してきた生物の数はあまりにも多い。よって、お前には輪廻はいい渡せない」

場が鎮まった。

鎌を持った男は、本を読み続ける、羽をもった女を見上げた。

「だが、ここまで人の心をよい方向へ変えた人間はなかなかいない。して裁判は天秤に委ねられる。だが私はここに言おう、輪廻はさせない」

白い本と羽を天秤にかける。

黒い本も天秤にかけられる。

ガク、と一瞬にして天秤は傾いた。

天秤は、善を示した。

「リージ、貴方は天へ行く。しかし輪廻をさせないと言いました。それでもよいですね？」

天秤の上の女は、白い扉へ目を向けた。

それを見てとった女たちは、白い扉をあける。

扉の向こう、花が咲き乱れ、まるで神話にあるような、石で出来た建造物。そこに、天へ言い渡された亡者がいた。

「ありがとうございます、感謝いたします!!は、そうだ、そこに紙とペンはありますか？」

リージは扉の向こうに広がる美しい光景と陽の光に、目を細めた。

そよそよと風は流れ、それに乗って花が揺れる。

「?あるにはあるが、何をする気だ」

鎌を持った男は、リージを扉の前へ立たせる。

「私は、そこでずっと書き続けたい。ここに来る前の夢は叶った。次の世界へ歩む人たちに感動を与えたい」

「永遠ですよ？」

女の言葉に、涙をぬぐうと、晴れやかな顔と声で、リージは確かにいった。

「構いません!輪廻なく、ここでずっと作品を書き続けることができるなら、私は幸せだ!そして、ここにいるあなたたちにも見てもらいたい」

リージが振り返る。

「私の作品を、地獄にも天にも、裁判所の皆にも見てもらいたい!」

笑い声が上がった。裁判所にいる全員が、笑いだした。

それにリージはきょとんとするが、皆は相談し合う。

「短期間のうちに遺作で人の心を変えた、人間が書くものはどんなのだろう。面白い、私たちは裁判がない間は暇を持て余している、持ってくるがいい」
その言葉を聞くと、リージが手を振って園へ踏み入れる。
やがて石でできた建造物まで行くと、紙とインクとペンを手に取り、書きだした。
白い扉が閉じられた。

それからしばらくたち、リージはずっと作品を書いては、ここに来る人々に読ませている。
明るい陽の光の下、作品を書き続ける彼は、特殊な存在になった。

「面白い人間ですね。死んでから遺したものが世に認められ、まさか我々の退屈すらも変えてしまうとは」

羽をもった女は、数枚の紙を手にしていた。

リージの作品である。

亡者のいない裁判所、リージの作品を読む彼らがいる。

「ああ、面白かった！久しぶりにドキドキしました。こちらの方の続きも読みたいです」

「それならもうすぐ出来上がるとか...」

白い羽の女も黒い羽の男も、夢中になる。

死んでもなお作品を残し続ける彼は、色んな人に感動を与えているという。

終

5.裁判-魔女アフェルタ-

女は秘かに愛する人がいた。

絶対に他人には言えない関係、秘すればもっとも禁断の関係に酔いしれる。

愛する人は同性、彼女は軽い病気を患っていた。

この時代、薬など作れば魔女として処刑されてしまう。同性愛ならば更に罪が。

病状悪化する愛する相手のために、彼女は薬を作り、渡した。

相手は病気が治ってきたが、その関係と薬を渡した所を、悪意ある他人に見られてしまった。

この世は地獄、言えば魔女として裁判がされる時代である。

女は十字に磔にされ、火あぶりにされた。

人間の裁判と死後の裁判どちらが正しいか？

天秤はどちらを示すか。それとも人間の裁判と死後の裁判の結果は同じだろうか。

裁判を始めます。

扉を開けて驚いた。

巨大な天秤と、冷たい空気。

右手に白い扉、その前に白い本を持った女と白い翼の女、計四人。

左手に黒い本を持った黒い翼の男が計四人。天秤の上に鎌を持った男と巨大な羽をもった女。

押しつぶされそうな空間。

処刑されたはずだった。熱さに耐えて、ワイワイと騒ぐ民衆の前で燃やされたはずだった。

意識が途切れる前に見えたのは、民衆に紛れて悲しそうな顔でこちらを見ていたあの人だった。

「ではこちらから始めます」

ぺら、と黒い本のページをめぐる。

「名前はアフェルタ＝ソレイユ。...殺した生物の数は三万ほど、それくらいですね」

更にぺらりとページをめくるが、特別悪いことは示されいない。

今度は白い翼の女も読みあげる。

「家族を病でなくしているようです。恋人はいましたが、死んだ理由は...」

裁判に次ぐ裁判、アフェルタは真っ青になって、天秤の前に坐した。

同性愛に、さらに薬を作って渡した、それだけで重罪だ。どんなことが起きるのか。

実際にそれで処刑されたのに、また処刑を味わうのか。

アフェルタは深くため息をついた。

「ああ、魔女裁判にかけられて処刑された模様」

一瞬場が静まり返った。

天秤の上にいる羽をもった女は、本を持った二人にいう。

「何か特別なことは？」

「...」

「...」

皆は顔を見合わせ、本をめくる。

「殺した動物も食べるため、草も薬や食べるため...ですね」

黒い翼の男は軽く石畳をける。

「普通だな」

それに合わせて、皆が頷いた。

「そうですね。普通ですね。特別目立つような良いこともなければ悪いこともない。薬を作って助けた程度ですね」

普通だと頷く彼らを見て、アフェルタは戸惑った。

魔女として裁判にかけられたのに、死後に自分の行いが普通と言われるのは。

「あの、裁判、ですよね？」

アフェルタは天秤の上の二人に問いかけた。

頷く二人に、あたふた戸惑い、自分のことを述べる。

「私が愛した人は同性、つまり女性です。さらに薬を作った...、これは立派な魔女です、裁判されておかしくないのです、私は死んで当り前では...!？」

アフェルタの言葉に、全員が顔を見合わせた。

「...人間の世界ではそうだろうが、ここでは、まあ同性愛くらいは。ただ、子供が作れない程度だろう」

黒い翼の男が軽くいう。それに続いて、白い翼の女も、本を眺めた後、アフェルタに目を向けた。

「そうですね。むしろ同性や近親相姦が当たり前な時代や国もありますし。あえて言うなら薬を作ったことは我々にとっては、草花や薬のために摘み取ったことは軽い罪ですが、他人を助けるためならば善と判断されます」

ぽかん、とアフェルタは口をあげた。

同性愛、更に薬を作って魔女として連れて行かれ、拳句の果てにひどい拷問をされて、やっと認められた火あぶりされた。

すぐに楽になる方法が素直に罪を認めるほかなかった。

聖なる火というものに手を焼かれ、聖なるナイフによって体をさされ続け、ボロボロになってやっと罪を認めて、想像を絶する熱と共に焼かれた。

魔女裁判は民衆にとって娯楽だったから、熱狂するヤジ馬たちにみられ、もうすぐ会えなくなる恋人の姿を見て、薄れた意識。

そしてやってきた死後の裁判では、苦痛を味わい認めた罪が、それが普通だった。

「で、ですが、これは...」

アフェルタは納得がいかなかった。

拷問もされて、磔にされて、足元に薪と油をまかれて、呼吸できないほどの火に焼かれたのに、それが。

「宗教などしらねえ。お前の生きた時代では罪だろうが、別の時代ではむしろ同性愛認められ

るわ、差別されてもいない。むしろ裁判した人間たちの方が罪重いはずだけど」

さらりと告げる黒い男翼の言葉に、脳天を叩かれたようにショックが響いた。

「え、えええ...」

両手を、冷たい地面についた。

「そ...んな...。何のために、私は焼かれたの...。何のために、私はあの人と別れなければならなかったの...」

アフェルタが急に泣き出した。そばにいる白い翼の女の服にしがみつく。

体重をかけて、その服に泣きついた。

「私は、罰ではないとしたら、何故...!!私はあの人と一緒にいるだけで、あの人と一緒にいたかっただけで、それが罪だって...、他にも私の様に薬を作って、貰っただけで死んだ人がいるのに!!」
広い裁判所には泣き声が響く。彼らは困り果てて、首を振った。

泣きつかれた白い翼の女は、身をかがめて、アフェルタの背をなでる。

「貴女は運が悪かったのです。人間など神話の時代から、それ以降数千年経った世界まで、それにあなたは知らないでしょうが、国が数え切れないほどあります。ここは時間軸が様々なので、それと同様に様々な人が来ます。英雄と呼ばれた人間、裏切りを重ねた人間、独裁者から善人まで。彼らを人間の罪に当てはめてしまったら、おかしくなってしまう。私たちは私たちの定義で、裁判を行っています」

優しく彼女を撫で、女が優しい声で言った。

それを聞いて、泣きはらした顔で、アフェルタは女を見上げた。

「なら、あの子は、私の愛した人はここに来るとのことですか！」

時間貸しべくというものを知らない彼女だったが、なんとなく言いたいことはわかる。

ここが死後の世界なら、彼女はいつか死が訪れる。

「もう来ているのか？」

天秤の上の鎌を持った男が、隣の女に呼び掛ける。

「人間の数など数えればきりがないですからね。ではここで裁判を決めたいと思います。本を乗せなさい」

白い本と黒い本が、天秤に乗せられる。

ギ、キギ、と重い音を立てて、天秤は傾き始める。

羽を今度は乗せる。

あっという間に天秤は善を示した。

「では、天へ。輪廻はどうしましょう？」

「特に非もないので、輪廻がいいですね」

「だが運の悪い女だ、その時代に生まれなければすんだものを...」

運の悪い女。それを聞いて、アフェルタは首を振った。

「いえ、私はあの人と会えただけで、大事でした。その時代に彼女がいたから、私はそれを支えに出来ました。彼女に会いたい...、もう一度でいい、会いたい...、でも、それすらも分からないのですね」

アフェルタはぐずりながら、白い扉が開かれるのを見つめていた。

美しい世界、空は青く、石造りの神殿。

花が咲いていて、たまに人が通っている。

天国とは分かったが、それでも納得がいかない。

アフェルタは立ちあがろうとしないので、白い翼の女たちは、彼女を立ち上がらせる。

諦めたアフェルタは、園に行こう足を運んだ。

「では、次の裁判を行います」

その言葉と同時に、重い扉の開く音がした。

背後から光が差し込むのに気付いたアフェルタは、すぐ後ろにある裁判所の扉の方を向いた。

そこには、優しい笑みをたたえたあの人がいた。

結局彼女二人は魔女としてほぼ同時に裁判にかけられたらしい。

アフェルタが裁判された直後、相手も同様に処刑されたようだ。

アフェルタは愛する人と再会できた喜びに、泣きながら抱き合った。

二人は天国行きを言われたが、輪廻を言い渡された。

輪廻は救済処置にあたるが、同時に今まで生きてきた記憶と、罪と善行すべてを忘れる。

魂は次の時代に引き継がれ、当然愛した人も家族も忘れてしまう。

だが罪が重ければ、輪廻すらさせてもらえず、もっと悪ければ地獄で焼かれ続ける。

彼女達はそれを聞いて、輪廻を拒否したが、白い翼の女は許さなかった。

いつか輪廻は訪れる。それもすぐ。

どの時代に生まれるかは分からない。

ただ一言だけ、彼女たちに羽をもった女は、いい渡した。

「出会いというものが真実であれば、また別の時代に生まれても、めぐり合うこともできるでしょう」

確率は非常に低い。

当然出会えずに輪廻を繰り返すこともある。

しかし、実際例がないわけではない。

輪廻し続け、その時代で様々な形で出会う人間の魂はある。

女の言葉に、アフェルタと彼女は、にっこり笑いあって、手をつないで園へ踏み入れた。

そしてしばらく経ち、罪人がしばらく来ない裁判所、天の園から帰ってきた白い翼の女が話題を持ち出した。

「そういえば、例のアフェルタですが」

「...魔女裁判のですね」

「無事に輪廻をいたしました」

二人は同時に輪廻のに入った。

どの時代に生まれたかもわからない。

「そうですか」

天秤の上で、女は頷いた。

二人は、再びめぐり合う。

姿も性別も国も別だが、同じ時代に輪廻を果たした。

それだけの会話をすると、また次の裁判が始まった。

終

6.裁判-無垢な子供サニャ-

十歳にも満たない女の子は、何ももらえなかった。

貧しいわけでもない、家族がないわけでもない。

ただ虐待という事実。

父の連れ子だった彼女は、父が再婚した母親から食事をもらうことが出来ず、やせ細っていった。

生きるために盗みもした。

見つかって通報されて、殴られ続ける。

そしてついに彼女は息を絶した。

では裁判を始めます。

ぺたぺたと音を立てて入ってきたのは、白人の子供。

素足にボロボロの黒がかった、元は白いワンピース。

茶色の髪の毛は短い、不自然な切りそろえられ方をしていた。

周りを見渡すと、彼女は首をかしげた。

「ここどこ？」

目の前には巨大な天秤。

右手に白い扉、その前に白い本を持った女と白い翼の女、計四人。

左手に黒い本を持った黒い翼の男が計四人。天秤の上に鎌を持った男と巨大な羽をもった女。

「わあ、綺麗!!お姉ちゃんもお兄ちゃんも綺麗!!その羽はどうやって生えてるの?鳥さんみたいに飛べるの!？」

ぱさ、と白い翼の生えた女の羽が揺れる。

冷たい床を駆け回り、少女は両脇にいる彼らに無邪気に触れて回った。

「鳥さんみたい、綺麗!!お兄ちゃんはお化け見たい、触ってもいい？」

「お黙り!!裁判を始めなさい」

天秤の上の羽をもった女が、少女を一喝した。

その言葉に、少女は異様なまでに反応を示し、その場にしゃがみこむ。

頭を抱えながら、何度も小さく呪文のように繰り返す。

「?...では、私から始めます」

「ごめんなさい、ぶたないで、ごめんなさい...ごめんなさい...」

静かな空間に、少女の声が木霊する。

それを遮る形で、黒い本を持った男はページをめくった。

「名前はサニャ=ブランスト。年齢は、八歳。殺した生物は三千。罪状を述べます」

黒い本をめくる。

サニャは、黒い翼の男の前でうずくまったまま。

面倒くさそうに黒い翼の男は、サニヤの方腕を引っ張って、天秤の眼前まで向かわせる。
手を引っ張れば、サニヤはガクガクと怯えて、引きずられていく。

「面倒癖えなあ…。ここで立っている」

サニヤは、天秤の前に立たされる。

うずくまろうとしていたので、黒い翼の男はサニヤの軽く背中をたたく。

その時に気付いた、ワンピースから見え隠れする、多数の傷跡に。

「ぶたないの…？ごめんなさい、サニヤ、悪い子、だから、怒らないで、いい子になるから、お願い、ごめんなさい」

「何だよ、急に。大人しくそこにいりゃ、叩く必要なんてねえから」

その言葉に、サニヤはすっと立ち上がる。

おどおどとした目をしながら、彼らの言葉を聞いていた。

黒い本を持った男は、ページをめくる。

「死亡原因は…ああ、これはよくあるパターンです。虐待による死。殴られ、転んだ際に頭を壁にぶつけて死亡。サニヤは死んだことに気づいてないでしょう」

それを聞いて、白い翼の女たちは、哀れみの視線を送る。

「可哀想…」

「虐待？確かにあの年齢であの格好にあのあざや傷跡は酷い」

その続きを述べる。

「盗みを繰り返していた模様。八歳で盗みを働くとは。盗んだものは、食糧から、金銭に至るまで。当然困ったでしょうね、盗まれた相手は」

そこに割り込んできたのは、白い本を持った女だ。

「お待ちください。それには理由があります」

白い本をめくる。

白い本には、彼女が生きてきたことが全て書かれてあった。

惨い、と一言いうと、女は顔を覆う。しかしすぐにいつものように続けた。

「家族構成がありますが、複雑です。父親とは血がつながっていますが、すぐに再婚し、家族は計五人。サニヤの上に義母の連れ子の姉と兄。義母は日常的にサニヤに暴力をふるっています。

サニヤは食糧すら貰えず、それによって盗みをしていました。いわば生きるためなのです」

ふむ、と皆が頷いた。

しかし黒い翼の男はそれに疑問を持ち、言葉にする。

「父親はなにしてたんだか」

「見て見ぬふり、のようです。また、義理の姉と兄もサニヤを気にしていなかったと書いてありますが」

ため息が聞こえた。

母の名前を出すと、サニヤが白い本を持った女の方を向いて、叫ぶ。

「お、お母さん悪くないの、サニヤ悪いの!!サニヤの目が嫌い、って、サニヤいなければもっとお母さんたち幸せだって…。お母さんたち悪くないの、本当なの!!お姉ちゃんもお兄ちゃんも、忙し

いだけなの!!」

「お黙り!!」

再度羽をもった女が天秤の上から叱咤する。

びく、と震えると、サニャは涙ぐんでしまった。

なるほど、虐待になれているから、怒鳴られれば過剰に反応するわけだ。

先程彼女を天秤の前まで導いた男は、地面をけてサニャの後ろまで飛んでいく。

「とにかく黙れ、あまりうるさいとまた怒られるぞ。黙っておけば、誰も殴らないから」

「本当？」

サニャはぐずりだしながら、黒い羽の生えた男を見る。

苦笑しながら、男は頷いた。

すぐにサニャは笑顔になる。

「黒い羽のお兄ちゃん、最初は怖く見えたけど、優しい」

「良いから黙っておけ」

サニャは涙を拭くと、ニコニコしながら、頷いた。

「困りましたね」

黒い本を持った男は、ページをめくって首をかしげた。

「どうした？」

天秤の上の鎌を持った男が、その男に問いかける。

「それが...、読めないのです。ご覧になりますか？」

ページには、何も書かれていないわけでも、読めない言語があるわけでもない。

ただ、真っ黒に塗り潰されたかのような、絵のような、それとも何かのような。

とにかくひたすらにクレヨンのようなもので塗りつぶされていた。めくってもめくっても、そればかり。

これでは元になにが書かれていたか書かれていないかも、わからない。

黒い本は正真正銘、途中からぐしゃぐしゃに殴り書きされた状態のページが続く。

「ん、ああ。ちょっと貸せ」

本を、隣にいた男が奪い取る。

「あー...これは仕方ない。これは罪状を述べると同時に、本人の罪の意識と迷いが書かれている。それだ」

「迷い?...ここまで塗り潰された本は見たことがないが?罪状を取り消したのではないのか？」

本を持っていた男は、隣でそれを聞き、奪い取られた本を覗きこむ。

時々出てくるのは、子供が描くような人間の絵。

それがどれも上から黒いもので塗りつぶされている。

「物書きの例がありましたね、時間軸が違う彼の場合では、確か白い本が止まらないほど書きたされていった」

白い翼の女は、サニャをちらりと見た後、天秤の上の二人にいう。

物書き、リージの例である。

彼は現在輪廻を禁止された状態で、天行きを言い渡され、ひたすら話を書き続けている。

その彼は死んだ直後、遺作が世界から評価され、次々と白い本に人の人生を変えたことが書き綴られた。

ここは時間軸が違う。くる人間は様々。

リージは死んだ後に評価されたが、人間でいえば実際は一年は経っているはず。ここに辿り着くまでに時間が掛ったか、たどり着いた後に評価されたか。

「彼の逆では？」

「なるほど。しかしこれはなんとなんて読めばいいのか...、とにかく返す」

黒い翼の男は、何度もページをめくるが、読めないことを目の当たりにし、首を軽く横に振ると、本を返した。

「!!わかりました。そちらの白い本にも何か描かれているはずです」

見え隠れする塗り潰されたページの下にある、もの。

盗みを働いた時のサニャ、笑わない家族、冷たい視線。

何度も描かれている、茶色の髪の白いボロボロのワンピースを着た少女。

それらが子供のクレヨンで描いた絵となって現れ、それをさらに上から真っ黒に塗り潰された。

サニャは先ほどから自分が悪いと主張している。

黒い本を持った男は、一つ間をおいて、通った声で言った。

「サニャにとって、自分の存在が罪である」

白い本の女は、いくつかページをめくると、やはり何か描かれていることに気付いた。

「わかりました、絵ですね。ただこちらはたった二ページ、塗り潰されておられません」

白い本を囲むように、四人の女はそれを見た。

「描かれているものは？」

天秤の上の羽をもった女が言う。

「これは、家族の絵だと思います。横に解釈が私たちの言葉であります。サニャの、過去です」

白い本には、茶髪の男と女と手をつないで、笑っている茶髪の女の子。

その横に、説明が載っている。

「手をつないでいる金髪の女性は彼女の実母、同じく手をつなぐ茶髪の男性は過去の実父。中央に描かれているのはサニャ自身です」

次のページは、うっすらと途中から消えている。

「それから、三人で一緒になって寝ている...絵ですが、こちらは消えかけております。たったこれしか。善行についても、ほぼこれのみで答えられるほどのものはありません」

本は人の心は無意識に移す。

白い本には彼女にとって大切で楽しくて、悪くない自分。

黒い本には、変わってしまった実父と、死んだ母の代わりに来た家族。そして塗り潰されている自分自身。

あまりにも子供すぎて、素直に心が絵となって現れてしまったようだ。

「読みあげようがないじゃないか。そろそろ天秤にかけたいのだが？」

鎌を持った男は、その二つの本を見比べながら、隣の白い翼の女に問いかける。

彼女も頷くと、天秤を指差した。

「本を天秤へ。羽より重ければ地獄へ、軽ければ天国へ」

本が天秤にかけられる。

それを聞いたサニャは、天秤を見た。

「サニャ、悪い子だから天国いけないって!!サニャ、お父さんとお母さんたち困らせる子だから!!

絵本で読んだもん、いい子しか天国へいけないって」

その言葉は無視される。

後ろで黒い翼の男が、何度かサニャの頭を撫でた。

「ママが、読んでくれたもん!!天国にはいい子しか行けないの!!」

全員が振り返った。

涙交じりの声に、「お母さん」ではなく、「ママ」の単語が出てきたからだ。

「ママ？」

黒い翼の男はサニャを覗きこむ。

「大好きなママ、本当のお母さん。サニャはママのこと大好き」

どうしたものか、と皆が考え込む。

「すまないが、ちょっと俺に任せてくれないか？」

黒い翼の男は、全員に向かって申し訳なさそうに聞いた。

天秤の上の二人は、皆と目を合わせると、無言でうなずいた。

「サニャ、素直なことを言わねえとどうしようもねえ。そのママに会いたいか？」

「サニャ、ママ大好き。会いたい」

「他は？」

「...お父さん、帰ってこない。あっても、話してくれない。お姉ちゃんとお兄ちゃんは...怖い」

「全てを言え」

命令口調だが、声は優しくかった。サニャは、彼にしがみついて、わんわん泣いた。

うるさいほどに響き渡る。

だが羽をもった女は一喝しなかった。

「サニャ、嫌い、お母さん嫌い!!でも嫌いって言っちゃだめってお父さんから言われた!!サニャは

いい子って、ママがいつてくれたけど、サニャ悪い子だった!!お母さんは嫌い、でもママは好き、

いつも優しく隣で本読んでくれたの!!長い髪の毛が似合うって、でも」

ぐずっ、と、また声が響く。

「サニャの髪嫌い、って、お母さんが切っちゃった。お母さん、ママのことも嫌いって」

不自然に切られた髪は、義母が、サニャの髪が伸びるたびにハサミで切り続けたそうだ。

白い本を持った女は、最初のページへ戻した。

「失礼、新たに加えられています。義母に当たるサニャの母は、実母のサニャを嫌っていました。義母は、実母が死んだことを喜んで、サニャの父目当てに結婚したようです」

更にページをめくると、消えかけていた本には絵が浮かび上がる。

内容をひたすらと言葉にする。

「服を買ってくれた実母の絵、三人で談笑する家族、ベッドで一緒に本を読んで眠りにつく」
白い本はまたも止まった。

「サニヤが六歳の時点で、実母の絵がないです。その先もやはり描かれていません」
それを聞くと、サニヤの側にいる黒い翼の男は、サニヤの頭を撫でた。

「サニヤ、良いか、これは誰にでもわかることだ。お前が全て悪いと思っている？」

「ママ死んだのも、お父さんが変わったのも、サニヤがいるから」

黒い本を持った男は、ため息をついた。

「やはり原因はそれか」

「このガキが自分が悪いとすべて思っているなら地獄行きだろう？」

他の理黒い翼の男が、本を持った男に向けていう。

本を持った男は頷く。

「仕方ないです。それが罪だと信じてしまっているのですから。子どもゆえにまっすぐで、純粹」

白い本の女と同時に、同じ言葉を言った。

「罪と信じ込んでいるなら罪」

「面白い例ですね。ここには子供はあまり来ないので、例がなかったのですが。その逆ならありましたが。本人が悪いと思っていなければ罪は罪と」

鎌を持った男は頷く。

「サニヤ、悪くないんだ。ママに会いたいなら、悪くないってはっきり言え」

サニヤは泣きはらした目で、男を見上げた。優しく笑う男を見て、安心して、サニヤは彼の胸に顔を埋めて、いった。

「サニヤ、悪くない!!サニヤ、ママにいい子って言われた」

黒い本が一瞬にしてまっ白なページに変わった。

塗りつぶされた絵のページだけが、まっ白に変わった。

「さ、て、以上だ。あとは天秤を例のように。余計なまねをしすまない」

サニヤから離れると、全員に向かっていう。

元の位置に戻ると、本は天秤に掛けられた。

もう片方は羽が。

天秤が動き出し、段々と天国へ示す。

「では、天へ。輪廻についてですが...このような子供、事情が事情ですから困りますね」

「輪廻はさせるべきでしょう」

白い羽の女たちは、天秤を囲んで話し合う。

黒い翼の男は、盗みを働いたことが一番気にかかると話し出す。

「盗みは盗み、悪いものは悪い、最初は自分が悪いと言い切っていたのだから、輪廻させるべきではない」

「いいえ、輪廻はさせるべきです」

黒い翼の男と白い翼の女は、人すらそれを続ける。茫然とそれを見ていたサニヤだが、指をくわえると、彼らに問う。

「りんね、って、なに？ママに会えるの？」

はっとして、先ほどサニヤといた男は、サニヤに告げた。

「そうだな、もしかしたら奇跡的な確率で会えるかもしれないな」

サニヤの実母はすでにここに来たか、それとも輪廻をしているかもしれない。

まだしていなければ、いずれかの形で出会える。

本当に、「奇跡」的な確率だが。

奇跡的な確率という言葉がわかっていないようだが、会えると聞いた途端、サニヤは満面の笑みで手を挙げた。

「サニヤ、ママに会いたい!!」

子供が無邪気に裁判で、死んだことにも気付かず、輪廻すらわからず、実母に会えると喜んでいる。

全員は顔を見合わせて、ふっと息をついた。

「子供には弱いようですね」

黒い本を持っていた男は、頷いた。

「まあ、これくらいのわがまま聞いてやれ」

白い扉が開かれる

白い翼の女は、サニヤの小さな手を握った。

ところどころにあったあざは、消えかけている。なかには火傷や切り傷もあったが、天への道標がさされた途端、綺麗に消えていった。

「ねえ、そのりんねをしたら、お父さん優しくしてくれるの？昔のお父さんに戻ってくれるの？」

拙い口調で、手を引いていく白い羽の女に問いかけた。

「ママに会えるかな？また、ママに会えるの？りんねをしたら、会えるの!？」

白い羽の女は、軽く頷いた。

それを見たサニヤは、彼女の手を引っ張って、嬉しそうに園を駆け回る。

ゆっくりと白い扉が閉まる。

冷たい空気、冷たい壁、冷たい天秤。

輪廻の意味を理解していないサニヤ、嬉しそうに園を駆け回るサニヤ。

天秤を見上げながら、サニヤと話した男は、呟いた。

「次は、家族に恵まれれば良いな」

天秤に掛けられた本は消えた。

「そればかりは確実なことが言えないので何とも言えません、が、同意です」
誰かが同意を示した。

終

7.裁判-電子の人間正行-

電子の波を泳いでたどり着いた。

彼は小説家になりたかった。

投稿を続け、見てもらうことを続け、見つけた先が、大型掲示板だった。

ここなら評価ももらえる、ここなら沢山の人が見てくれる、ここなら同じ思いの人がいる！

狂喜乱舞で固定のハンドルネームを作ったのは最初の一カ月。

一カ月過ぎれば実力差に気付き、自然と羨みから毎日固定ハンドルを外し、才能ある人たちを中傷した。

最近そいつら現れないなあ、もっと落ち込めばいいのに。

そんな矢先、彼は工事現場を散歩中に通りがかり、上から鉄板が落ちてきて押しつぶされ、あっという間に死んだ。

電子の波、知らない本名、知らない相手、知らない作品、知らないこと、いなくなった相手。

では裁判を始めます。

「うっわ、さむう」

たどり着いた先は、まるで小説の世界。

ライトノベルにありそうな設定だな。

彼はそう思い、目の前の大きな金色の天秤を眺めた。

上から何か落ちてきて当たった気がする。

でもまあいい。きっと夢を見ているのだろうし、夢からさめれば毎日パソコンに張り付いて、けなし続けられればいい。

ブログのあいつも嫌だな、謙遜してるくせに本当は自信あって投稿してるんだぜ。そういえばコテハンのあいつは、デビューしたんだっけ。あー、ムカつくムカつく。

後は自分を持ち上げれば、いい。

金色の天秤の前に立ってみた。

右手に白い扉、その前に白い本を持った女と白い翼の女、計四人。

左手に黒い本を持った黒い翼の男が計四人。天秤の上に鎌を持った男と巨大な羽をもった女。

「寒いなー、なんだよ、暖房もねえの？夢なんだから仕方ないけど」

黒い本を持った男が、声をあげた。

「彼の名は、相沢正行。年齢は二十七。死亡原因は事故死」

「なんだなんだ、俺が死んだって何だよ、変な夢だな」

正行は体を震わせて、息をつく。息は白い。

「彼は死んでいることに気づいてないのでは？」

他の白い服の女が、正行を見て、言う。

「何だよ死んだなんて冗談じゃねえよ、嫌な夢だな、早く覚めてくれよ」

「お黙り！」

突然天秤の上から、鋭い喝が入る。

「！怖！なにお前」

そういいかけたところで、天秤の上の鎌を持った男が、黒い本を持った男に指示をする。

「続けなさい」

「はい」

黒い本には色々なことが書かれているらしいことは、少し見えた。

「英語と日本語なら分かるんだけど、なに書いてあるの」

覗こうとやって来た正行を、黒い翼の隣の男は、軽く制した。

「邪魔すんじゃないねえ、お前は死んだんだ、死後の裁判だ」

しかし正行は分かっていない。

やはり死んだことにも気付かず、興味を持って本を取り上げようと手を伸ばした。

「え、そういう設定なの？何それ面白い」

「うるさいので黙らせなさい」

鎌を持った男は、呆れて彼を黙らされるように指示をする。

制した黒い翼の男は、軽く正行の口に向かって、人差し指を向けた。

それから一切声が出せない。出そうとしても、喉が焼かれるように声が出せない。暴れようにも、寒すぎて何もできない。

寒さに震え、正行は天秤の前まで連れて行かれた。

「えー...彼が殺した生物の数は四万、そのうち人間は、二人。直接的には殺してないのですが」
(殺した?)

正行には覚えがない。

両親は健在、死んだ祖父母は老衰だし、この前死んだ従兄弟だって病死。

(大体自宅警備員の俺が人を殺せるわけ...)

「大学卒済みの二十七歳、この時代ではよくいるパターンですが、よくいる仕事をしない人間です。だが夢を持っていた模様。それが小説家。この時代には、作品を発表する場がありますから、そうして夢を握る人も少なくありません。しかしそれ故に、電子の波で調子に乗りすぎた。彼は気づいていません、二人、殺したことに」

驚くほど自分のプロフィールを知られていることに、正行は焦りを感じる。

しかしやはり声が出ない。

「では、次は私が」

白い翼の女が、白い本を読みあげた。

「彼は、大変優秀な頭脳を持っています。両親に恵まれ、いい大学を卒業しました。しかし就職せず、そのまま。かといって、両親の手伝いくらいはしています。彼は、とても友達が多かった」

...多かった。

(そうだ、俺は友達が多かった。面白い奴とはいつもつるんで、遊んで...、あれ?)

そこで正行が気付いた。

全てが過去系になっていることに。

(...実際ここ一年であった奴何人? 皆は? 結婚、就職、夢を叶えて言った奴ら。俺、それで嫌になって、引きこもった)

いつからか、就職活動もうまくいかず、コミュニケーション不足から、友達をなくした。なくしていったのはいつか。

インターネットにはまりこんで、気にいらぬ人間の中傷を始めたあたりから。

俺は凄惨な奴だ、大学だってお前らと違う所でてるし、だから俺は絶対賞をとって、有名な小説家になるんだ。

そう言っ...?

「お待ちを。こちらの本に書かれていることを」

黒い本を持った男は、ページをめくった。

「彼がもっとも罪深い所をあげます」

(なんだよ、俺は何もしてないって!)

寒いな、寒い。

下を向いたあたりで気づいた。

自分の服が、真っ赤に染まり、段々黒に変化しているのを。

散歩中に事故に遭って死んだと言っている。

散歩中、白いセーターを着ていた。明るめのジーンズ生地ズボン。こんな色になるのはあり得ないはずだ。

散歩中、突然黒い影が落ちてきたのだけは何とか覚えている。

着ている服はところどころ白が見える程度で、ほぼ黒と赤に染まるセーターに、悲鳴を上げようとして出来なかった。

自分の肩を抱いたその手も、乾ききってない血で赤く染まっている。

叫ぶことができないのは、単純に先程黒い翼の男に妙なことをされて、悲鳴が出せないだけ。

寒いのは、自分の血で濡れて、そこから風が入りこんでいるからだ。

「間接的にとはいえ、人を二人殺しているところです」

「どういうことですか」

白い翼の女は、疑問を投げかける。

それに対して、黒い本を持った男は、軽く頭を抱えた。

「...、読めますか?」

そう言っ、隣の黒い翼の男に、本を見せる。

何度か見せられた相手は首をかしげて、さらに隣へ本を回す。

一体何が描かれているのか予測もつかぬことと、自分の姿に、正行はパニックに陥った。

しかしそれを気にも止めず、彼らは話をつづけた。

「あ、え? ああ、これ、この時代特有のだな、固定ハンドルネームって奴だ。ほら、絵描きとか

物書きが別の名前使うだろう。それに似たようなの。コテハンとかHNとか言われている」
なるほど、と、本を返してもらった黒い翼の男は、説明を聞いて頷いた。

「だから、そのマサ ◆3vCtYjWPfoって奴が、そいつの電子部分での名前。本名じゃない」
「ちょっと何言ってるかわからないです」

白い翼の女が、口をはさんだ。

「お前絶対知ってるだろ」

黒い翼の男がそのフレーズに、反応する。

白い翼の女は、くすくす笑い、頷いた。

「まあ、色んな時代の方がここに来てますから。知っておいて損なことはないです。面白い時代ですから、裁判の仕方かなり風変わりになりますね」

「電子？少し前の、テレビや電話の時代とは違いますか？」

他の女が質問をする。

「それを全て取り込んで別のものが生み出された、そんな時代です。一言では説明できません。時代の流れがあまりにも早すぎて、ついていけない部分が多いです。彼らなりの固定観念も簡単
に変わってきます。それより裁判の続きをどうぞ」

確かに中世的な雰囲気には似合わないだろう。

困惑し続ける正行をそのままにして、話を続けた。

「すみません、私には読めませんので、代理で貴方に話していただきたい」

黒い本を持った男は、先ほど固定ハンドルネームに詳しい男に渡した。

どうやらわけのわからない文字と数字の羅列に、なんて発言すればいいか全くわかってないよ
うだ。

「はいよ。正行、喋っていいぞ」

人差し指を彼の口の前で動かすと、正行は、喉を焼かれる痛みがなくなった。

が、体中真っ赤。すっかり言葉を失う彼に、皆の視線が集中した。

「この『大型掲示板の創作文芸板』って知ってるよな？お前が、マサ ◆3vCtYjWPfoって名前で、
パソコンを使って出た所。見て面白かったけど、顔の知らない奴と会話もできる、雑談もする
」

その言葉に、正行が顔をあげた。

べったりと血のりのついた手は、少し冷たい。

壊れた人形のように、首を縦にふる。

知っているもなにも、そこは自分のすみかだった。電子のなかでの、自分の家であった。

「知ってるなら話は早い。そこの、krs ◆fZAxddd8JU、RED ◆bljf0KurQwは、お前のライバル
だな」

言いづらい名前だな、と男は思いながら、読みあげる。

◆より前が彼にHN、◆移行の意味不明な文字列は、彼らがネットで本物ですというような記号と
思えばいい。

「あ、最近来てない、のは知っているけど...？」

その二人は、ずっと正行が執着して、作品を発表すれば、他人を装って、評価を散々にして荒らしまわった。

羨ましかった。

他人を魅せる文章、穏やかな性格、中傷されても逃げない。

そんな本名も顔も何も知らない二人は、一カ月当たり前から、急にその電子の中で顔を出さなくなった。

「どうせ忙しくてやめたんだろ？」

クス、と、本を託された男は笑う。

だが目は笑っていなかった。

「その二人、自殺したんだよ」

にっこりと歯を見せて笑う黒い翼の男の言葉に、背筋が寒くなった。

しばらく、その場に言葉は流れなかった。

ようやく口を開いたのは、代理として黒い本を読みあげた男だった。

「お前のやらかしたこと、全て書かれてある。まあ、お前だけじゃないさ。奴らを自殺に追いやったのは。krs ◆fZAxidd8JU、まずこっちな。ブログ持ってたよな。お前はそれを知っていた。小説を投稿して、見てもらう。確かそう言うシステム。たまに日記か。krs ◆fZAxidd8JU。こいつの本名は、大貫玲子。女だ。詳しいことは省くが、そいつは中傷に耐えきることができなくなって、手首切って自殺した。何が正しいか、何が自分で悪いか、何をしても人間を信じられなくなった」

「...」

「この時代でありがち、顔が見えない、住所も分からない。性別だって分からない。性格だってまともに知らない。彼女は全てを小説に捧げて、低学歴なことも気にして、迷った矢先にお前と出会った。うん、そんなもんだ。仕事、家庭、何もかもうまくいかなかった時期、支えだった小説に何も希望が持たなくなって、自殺したんだと」

ふむ、と彼らは頷いた。

正行は言葉が出ない。

「ですが、中傷したのは一人ではないのでしょうか。彼のせいですか？」

白い翼の女は、彼をかばうようなそぶりを見せる。

本を託された男は、何度か首を横に振った。

「書かれてるそのまま出すと、こうなる。タイミングが悪かった。が、その中の一人に、正行がいた。そんならいかな」

「気軽に意見を聞ける反面、人間の妬み、つらみ、羨望、全てが直接やってきます。疲れている時に、自身のあった作品を貶されて、耐えきれなくなった」

本を託したほうの男は、すらすら告げる。

「だからよ、直接的に人間殺したには変わりねーんだけど、こいつらも人間的に弱すぎるよな。時代と国によって全く違うとはいえ」

話を茫然と聞いていた正行は、今度は手を眺めた。

血は乾いてきて、パラパラと粉になって落ちていく。

「そんな話、あるかよ...、死んだとか、しらねえよ...」

羨ましいだけだった。

何もかもうまくいってるような、そんな文章に、苦しみなんて書かれているはずもない。

自分より学歴も低くて、それでもそんな文章を書いていたことすら知らない。

堂々と高学歴を自慢していた自分自身の言葉のたびに、彼女がコンプレックスをいただいていたなんて知らない。

「いや、ある...」

正行は記憶を遡る。

彼女がいなくなる直前、いつものように賞賛と中傷であふれかえるブログを見て、せせら笑った。

ほら、称賛より中傷が多い。

コメントを数えて、称賛の方が少なかったことに満足を感じた。

名前を変えて、媒体も変えて、「つまらない、読む価値もない、二度と現れるな」と、かきつづる。

自分以外にも彼女に嫉妬した人は多い。

ブログはその直後に止まった。

コメント欄のない最後の日記らしきものには、たった一言だけ書かれていた。

『諸事情により、以降更新できません』

背景が白多めの可愛らしいそのブログに、赤いその文字は妙に頭に残った。

「...え、何それ...あれ、遺書なの？」

もう書かないんだ、そう思っていたが、何かおかしいとは感じた。

でもそれを振り払った。ただただ喜んだ。ライバルが減ったことを、ただ喜んだ。

だって、彼女のころや私生活なんて全く知らないのだから。

自分が書いた言葉が彼女の心に刺さっていたなんて全く気付かなかった。

「あともう一人の方な、こっちはお前か原因じゃないんだけど、あいつはリージ=ミリアス、ここにかつてきた男だよ。日本語も結構出来た、お前にとって外人だ」

「ん、ああ、彼ですか」

名前を聞いて、皆が騒ぎ出す。

正行にはよくわからないといった様子で、一斉に話をしだす周りを見ていた。

「リージは確かに自殺でしたね」

「そうだな、あいつ、趣味で小説書いていたっけな。だが自殺原因は別だろう？大体未発表の作品が多かったじゃないか」

リージのことを知っていることに驚いた正行は、恐怖にかられる。

「何だ、なんであいつのこと知ってるんだ、なんなんだ、何があるんだ、俺は何をした？」

人が死んだ、軽い中傷。気晴らしに書いた悪い噂、それらが重なって、人が死んだことを知った

正行にとって、二人目も同じ末路をたどったことは怖くて仕方なかった。

裁かれるからとか、そういうものではない。

何となくやったことが、自殺の原因につながるものが、怖くして仕方なかった。

ただ、自分も死んだ事実は、認めざるを得ない。

なぜなら、この夢が覚めることもなく、全て言われていることが事実なのだから。

明晰夢にしたって、夕チが悪すぎる。

寒い、ここは寒すぎる。

「リージは借金を抱えていた。それで家族と別れた。その合間合間に、そこにきていたらしいな。日本人として過ごしていたらしいが、お前もうすうす気づいていただろう。リージが趣味で書いた小説」

正行はまたも記憶を遡る。

突然現れた、その人間。

時々文章が日本語としておかしい時があったし、日記を見てみれば、英字で書かれていた時がある。

後で分かったが、それらはもとは英字で書かれていて、彼の友人が日本語に訳していた。

日本語が不自由だとは感じたが、彼の書く小説は幻想的で、その中に人間の本音が見え隠れしていた。

きっとこいつ、自分を追い越す。

そう思って、彼にも。

「リージのその後を知らないとする、やはりリージとほぼ同時期に死んだのでしょうか、彼は」

羽をもった女は、手元に置かれている紙を見ながら、白い本を持った女に話しかける。

「そのようです。リージ死亡一ヵ月後のことなので」

「貴方に、リージがどうなったか教えよう」

本を託した男は、丁寧な口調で、正行に近寄った。

「彼は、自殺して一年は経過してからここに来た。貴方がここにいるのも、死んでから随分たっただろう。彼の小説は、元妻と友人たちの手によって、書籍化され、世界中で大ヒットを生み出した。白い本が止まらないほどの賞賛だった。彼は輪廻を自分から拒んで、ここにいる。白い扉の向こう、リージはずっと書き続けている。今まで裁判してきたなかで、随分と異例な例。実際、私たちも暇なときに読んでいる」

正行は、気がつけば、地面を強く踏んでいた。

悔しい、悔しい、せつかくいなくなったのに、自分が死んだ後にヒットしたなんて。

「何だよ、死んだくせに、ずるいじゃねえか!!自殺した弱虫のくせに！」

苦々しい言葉が、腹の底から込みあげ、言葉として出てきた。

「それが貴方の本音です」

優しい声で、男は言った。

「!!」

出る杭は打たれる、打たれて打たれてそのうちいなくなる。

そうして、何人もその狭い電子の波から消した。

狭い、ということでもた気付いた。

「...狭い」

自分がいたのは、インターネットのごく片隅。

そのごく片隅で、叩いては満足してを繰り返しただけ。

それが実際どうだろう、たった狭い所で、タイミングが悪く自殺した女もいれば、別のことが原因で死んで、その後世に出て、称賛された。

「じゃあ俺はなんなんだよ、間接とはいえ殺して、引きこもってずっと書いてきて、お前らは知っているのかよ、俺がずっと努力してたこと！」

しん、と静まり返った。皆の冷たい視線が、正行に突き刺さった。

「貴方は気づいていますね？」

「何がだよ」

いらだたしげに、肩に置かれようとした手を振り払った。

羽の生えた男は、目を伏せ、言葉を続けた。

「先ほど述べた人たちにも人生があり、彼らもまた努力というものをしていたこと。貴方達の世界では綺麗事と言われる言葉を、貴方に贈りましょう」

正行はその場にへたり込んだ。そして血まみれの手で、自分の顔を覆って笑い出した。

さすがに、皆は戸惑った。

「っは、なんだ、なんだ、皆同じじゃねーの!!バーカ、俺馬鹿だな!あーあ、何でこんな簡単なこと、気付かなかったんだろ!!」

顔が見えない相手、本音を隠す電子の波に書かれる言葉、それでも発表し続けたライバルたち。

「あー、そうかそうか、俺は本当、馬鹿だ!!そりゃ死んで当然だ!自殺に追いやってんだからな!」

ゲラゲラと壊れた笑い声が響き渡る。

「なあ、裁判って言ったけど、これって何の裁判なんだ?その扉の向こうには何があんの?もう好きにしてくれよ、いきなり死んでいきなり、あいつらの死んだ原因とか苦勞とか今更知って、馬鹿みてえ!俺って、井の中の蛙だったんだな!!」

覆う手の隙間から、涙がこぼれた。

人を殺した、他に原因が重なったが、原因の中の一人が自分。

人が死んだ、彼は死んでから真に世界中から評価された。彼の実力は本物だった。

人を殺した、何気なく書いた、羨望と嫉妬にまみれた言葉。

「小説家目指してたのにそんなことすらわかんない、馬鹿みたいだなあ。いやー、馬鹿なんだろうなあ、俺」

笑い声は段々小さくなっていく。

それを見ながら、羽をもった天秤の上の女は、指示を出した。

「では、本を天秤へ」

天秤の上に、黒い本と白い本が置かれる。派手な音を響かせて、傾いていく。

もう片方に羽を乗せると、地獄を示した。

「と、言うと、彼は地獄ですが」

「輪廻はさせるべきでしょう」

「輪廻なあ。どうする？一応反省はしてるみたいだが？」

ぼそぼそと相談を始めるが、彼らは輪廻を選んだ。

「俺、地獄行くの？」

そこに割って入った。下を向いたまま涙を流し続けていて、力なくその場で座り込んでいる。

白い翼の女は、彼の肩をたたいた。

天秤の上から本は消えてなくなる。

「残念ながら。ですが、すぐに輪廻させられるでしょう」

「そうか、そうか、輪廻か。生まれ変わったら、もっとまともなことやってやんよ。あ、そうだ。」

立ち上がり、黒い翼の男に、黒い扉の前へと連れて行かれる。

うつむいていたが、振り返ると、正行は笑った。

「REDことリージは、そっちの白い方にいるんだろ？その先に何かがあるか知らないけどさ、一言頼むわ」

白い翼の女は頷いた。

「ではどうぞ」

「俺、マサは、REDを応援してるってよ」

黒い扉が開かれた。真っ赤に煮えたぎる血の海。

それを眺めて、正行は頷いた。

「うっわ、熱そう。ずっと寒かったから、俺にはぴったりだな。んじゃ」

自分からそこに飛び込む正行を見た後、黒い扉は閉じられた。

「はい、マサさんですか。いましたね、懐かしいです」

リージは、花が舞い散る園にある、石で出来た机の上で、いつものように小説を書いていた。

周りに輪廻を前に駆け回る子供や、リージの小説を待つ人たちがいる。

白い翼の女は、正行の最後の言葉を、リージに告げた。

「そうですか...、応援してくれるとは嬉しいです。マサさんは怖い人だと思っていましたが、それでもなかったんですね、本当、インターネットというのはよく分かりません！」

書きあげると、白い翼の女に紙をつきだした。

「どうぞ、新作です！生まれ変わったマサさんにも、私の遺した小説を見てもらいたいです！」

終

8.裁判-約束と裏ぎりの辰之助-

老人は、幸せな人生を送ってきた。

学生時代を満喫し、妻が出来て、子供が出来て、孫の顔も見ることが出来た。

先に妻が死んでしまったが、老人は彼女と来世に会う約束をした。

しかし彼には誰にも話せない過去があった。

そんな彼はそれを誰にも言えず、心に秘めたまま、家族に見守られながら死んだ。

裁判を始めます。

「これは、これは...」

老人は目を細めた。随分と道や階段を歩いた気がする。

真っ暗な中目指すのは光で、扉を開けば天秤があった。

右手に白い扉、その前に白い本を持った女と白い翼の女、計四人。

左手に黒い本を持った黒い翼の男が計四人。

天秤の上に鎌を持った男と巨大な羽をもった女。

「裁判を始めます」

「...裁判、かい」

老人が、ゆっくりと頷いて、背中を曲げたまま、歩き出した。

「死後に裁判があるとは聞いていたが、このような所に本当にくることになるうとは...」

老人は何度も頷いた。

「お黙り。裁判を始めなさい」

天秤の上の女に一喝された。

黒い本を持った黒い羽の生えた若い男は、頷いて本をめくる。

「はい。名前は、如月辰之助。九十七歳」

「...」

辰之助はただ黙っていた。

「殺した生物十万を超え、殺した人数は、百七十八」

「ここは本当に裁判なのじゃなあ...」

なつかしむように目を細めた。

殺した生物は十万、人数は百七十八。

もっと、多いかと思った。

だがもっとも罪深いのは、数ではなく。

「彼は一人、裏切っています」

「...」

黒い本を持った男がすらすらと読みあげる。

その言葉に、辰之助はまたも頷いた。

死後とはいえ、年老いた老人の身に、この寒い場所はとても辛い。

だが裁判といわれれば、それすらも受け入れたい。

辰之助はそう思った。

「...一人ですか？」

白い本を持った白い翼の女は男に問いかける。

男が答えるより先に、辰之助はゆっくりと語りだした。

老人特有のどっしりとした姿勢。

全てを分かっているかのようなこと。

「わしは、何人も人を殺した。裏切りというのは、あの人のことだろう...」

全員が辰之助を見た。

黒い本には彼の悪事が、白い本には彼の善行が書かれている。

それはすぐに見て取れた。

「二度と後戻りはできない、裏切りだった」

何度も自分に言い聞かせるように頷いた。

「裁判を続けなさい」

鎌を持った男は、黒い本を持った男に促す。

それを聞いて、辰之助はまたも黙った。

「裏切られた人物は、柳谷伸」

「ああ、そうだ...その人だ...。とても、いい方でした」

どこか遠い昔にあることを思い出したようで、辰之助はずっと、天秤を見上げていた。

天秤を見ているのではなく、辰之助は過去を見ていた。

「自覚はあるのですか？」

黒い本を持った男は、何度か本を見た後、問いかける。

黒い本には彼のことが九十六年分書かれている。

白い本にも同じように。

「食料が、なかった」

辰之助はポツリポツリと話しだした。

「船が、おとされて。第二次世界大戦のさなかだった。大和や蒼龍すら沈んで、残ったわしらはどうすればいいか、分からなかった」

辰之助の過去が、本に映し出された。

黒い本のページをめくると、そこには沈んでいく船と爆撃にあい、怪我を負った何人かの人間。

そのなかに、若いころの辰之助があった。

「知らせを聞いた時は、日本は負けたと思った。真っ暗だった...、刀を手に、船と共に沈むあの人たち。涙が止まらんかった。男として泣いてはならんことだったが、彼らは立派だった」

沈没の知らせが届いたころ、ある船では食糧不足と壊れかけから、日本の近くを漂っていた。

黒い本には次々と映像が映し出されていく。

黒い本を持った男は、黙ってそれを見ていた。

「柳谷、は、犠牲になった。とても、とてもいい方でした」

救助を続ける船があるなか、彼ののった船は、少し遅れることになった。爆撃された場所が場所なだけに、食料はなく、船は海に載っていることがやっとだった。こびりついた血を落とそうにも貴重な真冬の水しかない。

「塩水で顔を拭くとね、痛むんですよ。潮風だけで、焼けただけ、痛みで死んだ人間もおるほど、酷い火傷でした」、

本に映し出される辰之助は爆撃を受けた何人かの人間と共に、今後の対策を練っていた。

しかし場所を特定されないのか、いつまでたっても、人はこない。

黒い本にはその言葉と共に、広い海を漂う船が映し出された。

若い彼は、何度も他の船と連絡をとろうと試みるが、どうしてもつながらない。

青い海軍の服を着た彼は、一人、死にゆく人間を見ていた。

「とても、いい方でした」

なくなる食料、とれない連絡、救助のこない船。

「人を、食いました」

それからずっとポツリポツリと語りだした。

「柳谷はとても、いい方でした」

それを繰り返す。

段々といらだってくる黒い翼の男は、黒い本を持った男に、話を続けるように促す。

しかし黒い本を持った男は、それを拒否した。

黒い本にはずっと映像が映っている。まるで、砂嵐のはいったテレビのように。

「火傷が酷かった。死んだ人間は何人もいた。目の前で、体が千切れて海に沈んでいく、けれど、わしらは救助で精いっぱいだった。生きている人間を...助けるのが精いっぱいでした」

黒い本を持った男が見せる時差に気になった他の男が、本を覗きこむ。

出てくるその光景に、ぐっと息をのんだ。

真冬、身を清めるために冷たい水をかぶって、出撃して、爆撃を受けて、人が散らばっていく。

「敵対した国を恨んでいますか？」

白い翼の女は、黒い本になにが書かれていたのかは正確には分かっていない。

しかし、彼らが息をのむと同時に、なんとなく、分かってしまった。

戦争の話であること、人を食ったこと、それらが本に映し出されている。

「いいや、恨んではおりません。わしらの方が恨まれても仕方がない、と、思います。柳谷には特に」

食料が尽きた。

明後日も明後日も出てくる食べ物はなく、ただ目の前には、火傷を負って、死にかける青年がいた。

皆と話し込む姿。

意を決して、辰之助が取った行動。

「もう少し、早ければ。近くに救助船がやってきたことは、知りませんでした」

本に映し出されたのは、息絶え絶えの青年、そしてそれらを取り囲む。

火傷で顔がただれて、彼はもう持たないと判断した。

「死後に裁判があるとは聞いてましたが...、本当にこのような形で裁判が来るとは、思いませんでした」

黒い本には映し出されていくものは、色あせていく。

日本刀、それを手にした辰之助。

食料が尽きた皆は、ただそれを受け入れていく。

「...戦争に付き物の食糧不足、だな？」

黒い本を覗いた男は、苦い顔をしたまま、辰之助を見る。

はい、と辰之助は何度か頷いた。

「わしはこのことを誰にも言えませんでした。愛する佐代子にも、娘や息子にも、このことは言えませんでした。孫に、学校の授業で使うからと戦争の体験談など聞かれた時、無邪気な孫たちに言えるわけも、ありませんでした」

次のページには、解体された人間と、泣きながらそれをむさぼり食う辰之助たちの姿。

あまりの光景に、黒い本を好奇心で覗いた男は、顔をそむけた。

「極限でした」

食うことをためらう腹をすかせた仲間にも促す。

「今でも覚えています。生臭く、気味が悪く、仲間を食っていることの罪悪感です」

うつむいたまま喋り続ける辰之助の頭の中を覗くように、黒い本には不気味な光景が広がる。

「柳谷の息を止め、食うように促したのは、わしでした」

血で真っ赤な顔をした自分の顔を拭き、殺した仲間を見ながら、辰之助はうなだれている。

そのころにはもう空は真っ暗で、綺麗な月が浮かんでいた。

その光景も、もうセピア色を通り越し、ノイズのはいった白黒の様な一枚の写真。

次のページをめくると、別のことが書かれていたが、映像として映し出されたのはそれだけだった。

「食うために仲間を殺したことは誰にも語れませんでした。ここで、全てを言うつもりです。柳谷の家族に言えるはずもない、柳谷は、爆撃で死んだことにしました。実に、わしは罪深いことをしました」

艦長が伝えたのは、柳谷が爆撃で死んだという、仲間をかばって死んだという偽りの言葉だったという。

それは全て文章となって本に現れた。

「辰之助は生きるために仲間を殺しました。まだ死んでもいない仲間を殺し、それを食べました。実に罪深い人間です。辰之助はそれを自覚しているようですが、これはどうしようもない事実です」

黒い本に時々出てくるのは柳谷の文字だった。

日本へ帰り、終戦になり、子供が生まれて、孫が生まれて、住む場所を変えて、日本は豊かになり、自然と年老いていく辰之助。

しかしその間に何度も柳谷という人物を殺したという言葉が出てくる。

「柳谷だけじゃあないですが、生きるためだけに殺したことは事実です。大砲の位置を確認して撃つ準備をするたびに、あちらの船にいる人たちにも家族がいることも知っていました。我らはお国のために戦っていると何度もいい聞かせて、人を殺しました。百七十八人、ですか。そうですか…。柳谷を含めて百七十八人…」

黒い本に書かれていることを、黒い翼の男は喋りはじめた。

「私たちも数多く見てきました。戦争、憎しみ合い、殺し合い、平和を互いに願いつつ殺し続ける、矛盾です。第二次世界大戦は私たちの記憶にも新しいですね」

黒い本を持った男は、感情を現さず、すらすらと読みあげる。

戦争は幾度も神話の時代から見ていた。一人が生んだ欲望のために何十万人が死んだ、この裁判が出来る前から人間が繰り返していたことも、全てを話していた。

辰之助は天秤を眺めていた。

鎌を持った男が、若干、昔殺した青年と似ていた。

辰之助は目が悪くなっていて、はっきりとは見えないが、それがどうしても柳谷と重なった。

「柳谷。すまんかったなあ…」

鎌を持った男は、自分に告げられた言葉だと気づいて、首をかしげた。

しかし思考を読みとって、軽く笑って見せた。

柳谷に笑うとよく似ているのだろう。

軽く笑った鎌を持った男を見た辰之助は、何度も頷いて自分の中で納得しているようだった。

「待ってください、彼は、仲間を助けるためにもそうしたのです。事実、救助船が来るまでに彼がそれをとらなかつたらどうなっていたのでしょうか。戦争というテーマは大変難しいです」

白い本を持った女が、待ったをかける。

白い本には、別のことが書かれていた。

白い本に映像として映ることはないが、それによって助かった命がいくつがあるということもまた事実だった。

「こういっては聞こえが悪いですが、彼が殺した青年は、救助されるまで持たなかったと思われます。彼も罪悪感がないわけではなく、他の仲間たちも、やはり同じ罪の意識を持っています」助かった後、辰之助は当時の仲間に出会うことはほぼなかった。

「はい、わしは仲間と会うことはできませんでした。部下たちが何度か手紙をくれましたが、読むことができませんでした」

辰之助は、ゆっくりと顔を覆う。

「柳谷のことが書かれていたら、わしを恨むことが書かれていたら、艦長に全てを押し付けたことを書かれていたら、そう思うと、怖くて読むことができませんでした。手紙は筆筒の奥深くに眠っています」

白い本をめくる。黒い本をめくる。

本を持った二人は、同時に発言した。

「お聞きなさい」

その声に、我に返って辰之助は天秤を見上げた。

黒い本を持った男は本に書かれていることを告げる。

「では私から。貴方は死んですでに一年は経過しています。貴方の遺品の整理をしている貴方の家族は、封を開けていない手紙を読んで驚いています。文字が読めないと、家族は何とかして読むことにしました」

辰之助は恐怖の表情を浮かべた。

手紙の存在を家族に知られたことに、勝手に体が震えていた。

「手紙の一部にある通り、貴方が行ったことを書いている者もいます」

辰之助は耳をふさぎたい衝動にかられたが、それを阻止したのは、羽をもった天秤の上の女だった。

羽をもった女が指を振ると、辰之助の体は動かない。震えさえ止まっているが、内心穏やかではない。

辰之助は更なる恐怖にかられ、彼らの言葉を聞くことにした。

皆に知られてしまったのだ。

「だがあなたのことを責めるものはいません」

今度は白い本を持った女が言う。

辰之助は、何とか顔だけ白い本を持った女に向かうことができた。

「貴方の殺した青年の家族は、もういません。また事実を知る者たちも、貴方を責めることはできませんでした」

「連帯責任という奴か？」

黒い翼の生えた男が、おちょくるように言うが、黒い本を持った男に軽く頭をはたかれる。

白い翼の生えた女たちは、苦笑して顔を見合わせるが、白い本を持った女は、躊躇なく頷いた。

「そうですね。はっきり言えば、そういうことに」

「じゃあ尚更こいつが他の奴らの人生滅茶苦茶にしたんじゃないか？」

「まあ、そういうことにはなりますが、仕方のないことです。人間は、食べなければ死に至りますから。大航海時代、彼らも人間を食べたりしました。ああ、失礼、人間自体を好んで食べる人種もあります。カニバ族ですね。他にも、カニバ族以外にも人間を好んで食べる例はあります」
ふむふむと、黒い翼の男たちは何度か頷いた。

「カニバリズムの語源になった奴らか。人間ってうまいの？」

黒い本の男は、首を振る。

「私がきいた話だと、とてもまずくて食えないと」

「あら、私がきいた話だと、とても美味しいらしいですよ」

「俺がきいた話だと、美味い奴とまずい奴がいるって」

白い翼の女の一人が話します。

白い翼の女と黒い翼の男は、情報を言いだしあう。

やれまずくて食えんだの、場合と人間によって全く違う。

そのやり取りを聞いていた辰之助は、一瞬目を細め、言葉に表した。

「柳谷を食った時は、生臭く...とても苦い味でした」

「罪の意識がとても強いですね、辰之助は。...あら、これは？」

白い本をめくると、写真が現れた。

今くらいに老いた辰之助が、しわがれた手を握って、泣いている姿だった。

「奥様ですか」

「!!」

天秤の上の女は、軽く指を逆に降ると、辰之助は体がとても自由に動いた。

その拍子に、辰之助は重要なことを思い出す。

先に死んだ、最愛の妻、サヨとの約束だ。

「サヨ？彼女と約束をしましたね」

「はい、しました」

それだけ言うと、辰之助は黙ってしまった。

しばし沈黙が漂い、白い本を持った女が、話を切り出した。

「本に書かれていることをそのまま述べます。辰之助は人あたりのいい性格でした。特に、妻であるサヨを愛し、家族を見守る続けました」

「...愛するが故にいえませんでした。人を食うたなどと、言ったら、家族に何と思わるか。愚かでした、私はとても愚かでした。だからこうして言えたことをとても嬉しく思います」

サヨもまた、寿命だった。年上の妻、彼女は辰之助と約束を交わして死んだ。

「約束、とは」

黒い本にはなにもかかれていない。

「いつか本当のことを言えたとき、輪廻転生が出来たならば、また夫婦となる。夢見ごとの様な約束です」

辰之助は小さな声で交わした約束を言った。

「輪廻は確かに存在はするが、そう簡単にあえねえぞ」

黒い翼の男は、壁をけりながら呟いた。

黒い本を持った男は、それを眺めながら、頷いた。

「はい、ですから、夢見ごとの様な、約束です」

男は再び本を開く。

黒い本に書かれている人数ではどうにもわからない。

もっとも罪深いと判断された者たちは、今までに何十万という人間を手にかけてきた。

ここで裁かれた例で言うなら、テフィルスがそれに値するだろう。

彼は英雄として先陣を切って戦い、指揮してきた。それに巻き込まれた生命も人間も、「約」という数でしかあらわせない。

そして辰之助は、裁かれることを望んでいるのではないかと、男は考えた。

裁かれることを望んでいれば、彼は自分から地獄へ行くことになる。

白い本の女は、ぺらりとページをめくる。

「こちらの本で述べますね。彼はそれを覗けば、とても評判も良く、人々に愛されました。やはりそれは今までにいくつもありますから、食人は。好き好んで殺すものは多数見ましたが、彼の場合はそうせざるを得なかった。そしてそれによって悩まされながらも、清算するように穏やかな人生を送りました。ということで、私は彼は天へ行かせるべきと思います」

白い本の女は今までのことをまとめた。

黒い本を戻せば、涙を浮かべて歯を食いしばり、刀を抜く若いころの辰之助。

「清算なんかできるの？神様なんていないのに？そうやって殺して間接的な被害は百何十程度じゃねえだろ？第一殺した生物の数も多い、そりゃあ食うためもあるし、間違っただけ踏みつぶしたもあるけど。いや、そんなことより殺された柳谷とかいう男だ。息があって、目の前で刀抜かれて殺されて食われたんだぜ」

一呼吸おいて、壁をけっていた男は、向き直った。

「上官に裏切られたも同然だからな！」

辰之助はその言葉にひどくおびえるような視線を送った。

しかしそれを無視して、黒い翼の男と白い翼の女は喧嘩を شدした。

「いいえ!!彼の決断は間違っただけではありません。仕方のないことです!!それを言いましたら...」

「それも一理ありますが、生物も人数も多いですね、そして何より」

ちらりと辰之助を、黒い本を持った男は見た。

「彼自身、裁きを受けることを望んでいると思うのですが？」

しばし、四人と四人で言いあいが始まった。

天へ行かせる、生かせないのやり取りを聞いていた辰之助は、天秤に向かって大きく声をあげた。

「いつか本当のことが話せたならば、会いましょう」

鎌を持った男は、その言葉に首をかしげた。

「はい、その通りでございます。今この場で、話せたことは、とても喜ばしいこと。柳谷も辛かったでしょう。苦しかったでしょう。裏切られたと、死ぬ間際に思ったでしょう。全てが話すことができなかつたら...私は愛する妻に会う資格はないのです...。私は、過去を全て話したかった。そしてサヨと会いたかった」

黒い扉の近くまで辰之助は歩いていく。少しだけ、扉の隙間から熱気と血のにおいを感じることができた。

そのにおいは昔によくかいだ匂い。

鉄錆の様な、吐き気のするような。

それを熱した鎌に入れれば、むせかえるほどだろう。

「皆への、特に柳谷への、償いをさせてください」

鎌を持った男に話しかける。驚いたような顔をする男を見て、辰之助はやはり柳谷とダブらせる

。

柳谷はまじめな性格で、少し冗談を言えば驚いて笑って見せた。

その後の人生は本当に順調で、子供に恵まれ、住民ともうまくいって、孫たちが出来て。けれどどうしても忘れられないのは手にかけて柳谷と、その責任を艦長に投げたことだ。

「辰之助」

黒い本を持った男は、天秤を見上げた。

「貴方が完全な悪と思い、貴方が罪と思い、貴方が全てを背負うのならば、裁きは通常よりはるかに重くなります」

「では、本を天秤へ」

白い羽をもった女は、天秤の前へ降りると、羽を乗せる。

「そうですよ。貴方はこの先になにがあるか知っていますか？白い扉には花園と白い建築物があります。嵐も雨も雪もない、穏やかな場所です。その黒い扉の向こうには...」

そういいかけて、白い羽を乗せた女が、白い本を持った女にいい放つ。

「お黙り!!それ以上言ってはなりません」

ピシャリと叱咤されて、白い本を持った女は、はっと気付いたような顔をして、すぐに謝った。

「年月がどんなに立とうと、もう一度だけサヨに出会えるなら、私は喜んでこの先に行きましよう」

血の匂い。

「ふうん、戦争に関わった人間すべてがそれを選ぶわけじゃないし、白い方にいった奴らも多いんだぜ？開き直ってもいいんじゃないの？」

また別の黒い翼の男が、辰之助を眺めながら、呟いた。

戦争に関わった人間が全員来るわけでもないが、全く来ないわけでもない。

第一戦争の首謀者が来たことだって何度もあるが、彼らは自分の行いを善であると主張し続けた

。

彼らの場合は殺害生物数が辰之助の比ではなかったもので、大抵は地獄に行ったが、善行だと信じて疑わないので、少しは天秤がその感情に動かされて、罪が軽くなることだってある。

またそれに関わった人間も、全員が地獄に落とされるかということそうでもない。天へ向いて輪廻したものは数えきれない。

そのなかに、人を食った、仕方ないから食ったという人間も勿論いた。

が、天秤にかけようとしたところで、黒い本はとても重く感じた。

「いいんですね」

鎌を持った男は、いつもの取り澄ました顔で辰之助に問いかける。

もう結果は、天秤が示すまでもなかった。

傾く辰之助を見て、天秤に本が載せられた。ぐらぐらと傾く。

重い音を立てて、段々と地獄へ示す。

そしてそこで止んだ。若干、地獄を示した所で止まった。

黒い本と白い本は消えてなくなり、天秤は羽をもち上げられれば、もとの姿勢に戻る。

「黒い扉を示しましたね。ですが、罪はそこまで重くはないです。罪が清算されるまでの年数は人間と時間軸が異なるので言えませんが」

「お願い、します」

辰之助は小さくつぶやいた。

「さて。輪廻は？俺は反対だ。地獄へ行ってとことん苦しんでくれれば面白い」

「まあ、面白いだなんて!!命を何だと思っているのですか、裁判所で言うことではないです！」

「地獄で苦しむ人間の管理するのは俺らだけ。命の重さは分かってるから余計だな。だからここで裁判官なんかしてんじゃねえか！」

壁をけていた男と、白い本を持っていた女との言い争いが今度は勃発した。

「せめて輪廻はさせるべきです！第一、彼にはまってる人がいるのですから！」

「ダメ！」

「ダメじゃない！」

黒い本を持っていた男は、それを聞き流して、呆れた顔をしている。

いつものことだが、輪廻云々は非常に大事なことで、今後の世界に関わること。

故にここまでもめるのは仕方がない。

が、辰之助は一つだけ先程から希望している。

「...サヨには、会いたいです」

頭を垂れる辰之助を見て、本を持っていた男はね隣で怒鳴る男をつついた。

「私は、彼女たちの意見に賛成です。その先になにがあると分かって償おうとする精神は認めるものがあります。そうでしょうか？」

今度は、本を持っていた男は視線を天秤の上の鎌を持った男へ投げかけた。

「『柳谷』さん」

辰之助が、先程から鎌を持った男を見て、柳谷に見立てているのを知っていた。

勿論彼は柳谷本人ではないが、辰之助の心を動かすには十分だった。

「柳谷、これだけは...。お前の苦しみも全て私が今度は味わう、味わわせてくれ。けれどお前が許した時、本当に許した時に...」

辰之助の足もとにぱたぱたと水滴がたれる。

涙だった。うつむいた彼から、涙が出ていた。

「新しい人生を、妻と共に歩ませてほしい」

「...そんなに似てますか。輪廻に関してですが、私は輪廻はさせて良いと考えています」

鎌を持った男は、隣の女に目くばせする。彼女も何度か頷いた。

「多数決でも明らかです。...辰之助を黒い扉へ」

白い羽をもった女が、黒い翼の男たちにいい渡す。

扉が開けられ、向こうは煮えたぎる血の海、。

中で苦しみあえぐ人間が見えるが、それを前の辰之助は飛び降りていった

「疑問に思うんですが」

と、黒い扉が閉まるのを見届け、鎌を持った男は隣の女に話しかけた。

「輪廻をしてまたその相手に巡り合えるという幻想物語は、一体どれくらいなんだ？」

白い羽をもった女は、しばらく考えた。

そして語り出す。ここに来た数えきれない人間たちのこと。

「...過去に例がありました。何度も巡り合う、何度も何度も輪廻を繰り返して出会い、別れる二人。そこに、その人たちの周りの人間たちも何度か絡んでいるらしいのです。つまり、奇跡は存在はするらしいです」

ふむ、と鎌を持った男は頷いたが、納得がいかないようだ。

「奇跡という単語ではぐらかされてしまった」

「勿論出会える確率の方が絶望的なほどです。その間何百年何千年経っているかは分かりませんが、めぐり合う人間は、彼らにとって気の遠くなる年月をかけて何度も死んで何度も生まれて何度も巡り合っている、と」

「...まあ、そのあと出会えたかどうかは私たちの知ることはありません」

黒い本の男は、扉に背を向ける。

その場で全員が頷いた。

「ここは死後の裁判所なのでから」

黒い鎌を持った男が、最後に言った。

終

9.裁判-復讐者シリフ-

かの国の英雄はこの男にとっては悪魔だった。

何度も侵略され、国は弱まっていく。

男は国の見習い医師、国は何度も会議を開き、この男の師匠も呼ばれた。

時には位が高くなった男も交えて会議を開いて対抗手段をいくつも考えた。

そして男は答えを出した。

敵国が先陣を切って侵略し続ける男を、猛毒を塗り付けたナイフで殺す。

それをするのも作るのも、この男に委ねられた。

敵国に侵入し、英雄を誰にも知られず殺すことが出来たが、自国へ帰る途中に流れ矢に当たって死んだ。

では裁判を始めます。

目の前には巨大な天秤。

右手に白い扉、その前に白い本を持った女と白い翼の女、計四人。

左手に黒い本を持った黒い翼の男が計四人。天秤の上に鎌を持った男と巨大な羽をもった女。

男は、何故ここにいるのか思い出せないようで、ふらふらと天秤の前に膝をついた。

「何だここは...」

男はめまいを覚える。

重い空気が漂う。

翼の生えた男と女は、じっとこちらを見つめてきた。

天秤の前、動くことすら出来ない。手には毒をぬったナイフを握っていた。

「では始めます。名前はシリフ＝アーディ。三十五歳」

本を持った男が、名をあげた。

彼はシリフという名前であり、確かに覚えているのは、森の中で、敵国の流れ矢に当たって苦しみ死んだことだった。

「医師として働いていた。死亡時、毒を塗ったナイフを所持しており、流れ矢は胸に刺さり、それによって死にました」

「そうだ、俺は国を救ったんだ!!」

黒い本を読みあげる男は悪魔か、白い本を持った女は天使か。

ならばこの先にいるのは神の国か。

「そうだ、テフィルスをついに殺した、殺したんだ!!」

「お黙り!!」

天秤の上の女が一喝する。

それに頷いて、本を持った男は続けた。

つらつらと挙げられる文章はまるでシルフの耳には入らない。ただ、達成感だけがあった。

そしてこの先には国がある。神の国があるという。何度も書物で読んだその国が。善人だけが行けるといふ国。

ただそれをずっと思い描いていた。

「テフィルスを殺害しようとし…」

黒い本を読む男のその言葉に、シリフは生き生きとそちらを見た。

「テフィルスは死んだ!!俺がこのナイフで殺したんだ!!」

毒をぬったナイフは鮮やかに銀色に輝いて、汚れがまるでない。

その先に塗った毒は、自国で作られた猛毒だった。

テフィルスが病に伏せっていると聞いて、急いで毒草を煮込んで作られた毒。

それをナイフに塗って、テフィルスが居る部屋にいて殺してこいと、上司から言われていったことを思い出す。

この毒は強力だった。様々なもので試した。

死刑囚に緊急で作ったその毒を針に塗り、ぷすりとさしただけで、あっという間に死んだ。

声もあげられず息絶えたそれを見たとき、シリフの心が躍った。

小さなナイフにそれを縫って、与えられた。その時のシリフは、大切な仕事を任された、そして国を救う英雄になるという思いでいっぱいだった。

元々は薬物に詳しい有能な医師だ、別の国の経由で、自国にとって悪魔であり、その国にとって英雄であるテフィルス殺害のために潜り込むのは、割と簡単だった。

数えきれない軍を率いて他国を潰しにかかっていたテフィルスは怪我をして、そこから菌が入り込んだらと思うわれ、熱病に侵されていた。

テフィルスのためにと、与えられた部屋で一人そのナイフを握りしめて、気付かれないように足を刺した。

「テフィルス? 思い出せそうな気がします」

黒い本を持った男の話の聞いているうちに、白い翼の女の一人は、首をかしげた。

「地獄行った英雄じゃないですか」

「ああ!!なるほど、彼ですか。確か永遠に地獄の最深部で焼かれていますね」

天秤の上の鎌を持った男が、白い翼の女に教える。

中々使わない鎌を使ったからこそ覚えている。

やり取りを聞いていたシリフは、それを聞いて狂ったように笑い出した。

「はは、は、俺は間違っただけでいかなかった、テフィルスは地獄へ行った!!俺は国を救った英雄になったんだ!!」

ゲラゲラと笑い声が響くこの部屋、黒い本を持った男は、一瞬シリフを見た。

ナイフを持った手を高く上げて、神に祈るように笑い続ける。

「英雄だ!!俺は国を救った!!テフィルスは地獄へ行った!!」

「…です、が。テフィルスの死因は病死です」

とたんに笑い声が止まり、シリフは驚きを隠さず、黒い本を持った男を見つめた。

「…病死？」

「そうです。所で殺害数と人数を見ている限り、だいたいのことをしましたが、医師の探究心故ですかね」

ふむ、と、黒い本を横から覗き見る他の黒い翼の男も頷いた。

「今まで殺してきた生物なんて考えたことがない。死刑囚や捕虜を使って実験はした。医師なんだから当然だろう!!」

シリフは勢いに任せて噛みつくように怒鳴りつける。

しかし黒い本を持った男は、何の戸惑いもなく、むしろ聞いてないようなそぶりで、隣の男と相談をしあっている。

「ではこちらの本を読みあげます」

白い本を持った女は、彼らがずっと会話しているのを見た後、続けた。

「彼の国は壊滅しかけていた所に、それを救うためでした。その行動が、毒殺という手段です。それにシリフには四人の兄弟がいます。貧しい国にとって、有能なシリフは救いでしょう。救ってきた生物も人数も大層なものです。特に兄弟にとっては、シリフがいなければとっくに国を出ていくしかなかったと思われます」

大事な兄弟。家族を持ったけれど、国が貧しい、蝕についても大した金を得られない。そんな兄弟のために、せっせと貯金をしてはそれを切り崩し、薬を作り続けた。

色んな薬を作った。

大量の人間を救った。

「そうだ、俺は国にとって英雄だ」

道の草だって手にいれては、不治の病とされる病気を治したこともある。そうして効能を発見しては薬を作って、一気に昇進した。

その中で新たに作られたものは、テフィルス殺害の計画。国の一部でしか行われず、絶対に外に情報等出せない。

あの悪魔に、死を。あの悪魔に、地獄を。

聖剣なるものを持って戦い続け、潰された国は数知れないあの悪魔に。

そう思いながら、急いで国を介して、出身も何もかもを偽造して、優秀なテフィルス専属の医師として紛れ込んだ。

「と、失礼。こちらのことを述べます。やはり殺害生物より、人数が...特殊なことになっています」

黒い本を見ながら、男はページをめくる。何度もページをめくり、戻る。それを繰り返す手つきを見ながら、シリフはナイフを握りしめる。

「これみてっと、間接的な殺害人数が...二十万ちょいなんだよ」

本を持った隣にいる男が、首をかしげて告げた。

「二十万？間接的に？」

その場にいる誰もが、異様なまでの人数だと、述べはじめる。

シリフは混乱する。

殺害生物ではなく、人数が二十万以上。

確かに人体実験は何度も行ったが、自国の人数レベルで人を殺した覚えはない。

と、自国の人数が二十万程度ということを知っていたシリフは、まさか、と小さく口に出した。

それを気にも留めず、黒い本を持った男は、ページをめくり続ける。

「ああ、ありました。シリフが間接的に殺したものはたしか二十万と少し、これはあまりにも多いので述べられないのですが」

「国一個壊してる」

本を持った隣の男もの言葉に、皆は首をかしげた。

だが、シリフは今度は喜んで声を上げる。

「国を一個、その国はテフィルスの国だ!!」

ついに英雄がいなくなったことで、全てが崩壊したのだと思った。

その国にとってテフィルスがいなければ、この歴史はなかったといわれるほど、テフィルスの評価は高い。

またも高笑いが響く中、本を持った男は冷静に口にした。

「壊れたのは貴方の国です」

シリフの高笑いが止んで、動作が不振になる。

「どういうことだ!？」

確かに殺したテフィルスが病死、かけられた毛布の上から刺したはず。手に汗を握って、誰にも見られないうちに天蓋のある豪華なベッドに忍び込んで。

そして、その直後に、すぐに、テフィルスは無事だと告げて、しばらく安静にと告げて、国に帰ったはずだった。

勿論その途中、流れ矢が当たって死んだのでここにいるのだが。

「早い話が、お前は、流れ矢が当たって死んだことと、テフィルスの毛布に穴が開いていたこと、同時に文書偽造がばれて、敵国怒らせた。あとは分かるな？」

流れ矢に当たった時に持っていたものは、テフィルス殺害した胸を上知らせるための一枚の書類。

もしその文書が敵国に知られたら？

「何故テフィルス専属の医師が、国の城壁の外で死んでいる？なぜ手にはナイフを持っている？」

あげられる言葉に、シリフは硬直した。

「まあそういうこと。残念だったな、何でそんな大事なものを持って出かけるんだ、医師として有能だけど大事な部分はスポンジで出来てんのか」

「スポンジ？」

シリフには知らない単語である。

「お前の時代にはないか。えーっと、そのあと国が壊滅して繰り返してな。今は割と落ち着いてる。戦争とか災害は相変わらずだが、お前らの時代よりはまだましかな。えげつない所は相変わらず人間のやることだけど。まあ、そのスポンジってのはすかさずかなの。柔らかいの」

黒い本を持った男が苦笑するほどの隣の男はべらべらしゃべり続ける。

楽しそうに喋り続ける男は、息を大きく吸い込んで、固まるシリフに大声で言う。

「要は、お前はアホか」

生きて帰る予定しかなかった。すぐに出て無事に国に帰り、国境を越えれば無事が確認される。

当然シリフの他にも紛れ込んだものはいたが、重要な部分はシリフが管理していた。

たまたま国境を超える途中で、矢が刺さって死んだ。

書類とナイフを持って。

死んだ後のことなど考えたことがない。

長い螺旋階段を上った先がここで、ここがなんなのかもわからない。

彼らの持っている本も黒い、としかシリフには分からず、どんな繊維かもわからない。

そもそもその本が紙で出来ているかも怪しいほど、見たことがなく神々しくもあり、まがまがしくもある。

だがそんなことはどうでもいい。

「国は消えた？潰れた!？」

「そうですね。こちらの本にも書かれていますよ」

白い本を持った女も、ページをめくった。

だが善行しか書かれていないので、どう死んでどういう壊れ方をしたのかは分からないと、黒い本を持った男に譲る。

そのことを組んだ黒い本を持った男は、更にページをめくった。

「詳細を。貴方が死んだすぐ後、死体は見つけれられてしまいました。これがすぐ後で、敵国に見つかってしまいました。当然手にナイフや薬、そして例の書類一枚を持った、その敵国の紋章のはいったものだった。当然ながらすぐにおかしいということで、全てが暴かれてしまいました」シリフは声が出ないほどの絶望に覆われた。

「貴方がスパイであることが気づかれてしまい、その直後、テフィルスは死亡しています」

「そ、そんなことは、おかしい、何でシリフは病死なんだ。いや、兄弟は、国は、何で...どうして!!」

シリフは何もかもが嘘であると思おうと必死だった。

それに対してとても冷静な声が響く。よくとおる男の声だ。

「はい。貴方は焦りのあまり手元が狂って、実際にはテフィルスに毒をぬったナイフなんて刺していないのです。なので、テフィルスは殺害人数に含まれていない。その代わりに、流れ矢の当たった死体を見つけられたことで、敵国は貴方の国を全力で潰しにかかったんですね」

「続き知りたい？」

本を持った男の隣の男は、ニヤニヤしながらシリフを見た。

震えるシリフは、汗をだらだらと流しながら、頷いた。

壊れた人形のように。

「テフィルスがまず怪我した時点で、テフィルスは、己に代わる奴を見つけてたんだ。そいつが

代わりに軍を率いてたの。テフィルスから教えられた方法でな。まあ、カリスマ性はテフィルスより劣るけど、結構な人間だ」

「...」

「それで、お前の死体のご丁寧に調べられたとき、ボロが出まくったわけだ。その時のその国らへんでその薬に使われたものが生息しているのは、お前の国内だけだった。毒だとわかっていたのは。その手掛かりはナイフから、あとは穴のあいたテフィルスの毛布も調べられて。壊れかけていた国を潰すなんて、英雄を継いだ人間にはたやすい。あっという間に大量の軍が放り込まれて、お前に関わっていた家族は、残虐な手口...まあ俺が言うのもおかしいけど、結構な苦しみを受けて死んでいった」

黒い本を持った男も頷く。

「貴方が死刑囚を殺したのと同じように、貴方の家族は残念ながら、様々な実験や民衆の娯楽、他国への見せしめとして処刑されました」

シリフの脳内では、様々なことが駆け巡る。

小さいころから貧しいのに勉学に努めるシリフを支えた兄弟。やっと入れた小さな医院から、才能を発掘され、王宮に仕えることになった時の喜び。

そこでも実力を発揮した。

なにぶん医師でしかないので、大量の兵下への特効薬を作ることばかりに気をとられていた他の医師とは違い、毒草に着手し、自国でとれた毒草を調合した時。

調合方法が特殊だった。

煮だしたりするだけでもなく、乾かしたり、他のものをくわえたり。とにかく、テフィルスを殺せば済むと思っていた。

テフィルスを殺せたと思った時に、気が緩んだのは確かだった。

これで国が救える、敵国はひるむ、自分自身は正真間違いなし、家族は更に裕福になる。

実際にスパイとして潜り込んでいたのはシリフの国だけではないはずだ。

テフィルス死亡が外に広がれば、他の国だってかたきとばかりにその国に襲いかかってくる。

はずだった。

「そうですね。軍を率いていたテフィルスだけが優秀だったわけではありませんから。テフィルスの国は随分と武具に関する所が進んでいたようですね」

白い翼の女の一人が、なるほどと相槌を打って聞いていた。

「家族が見せしめ、国...」

あまりにもナイフのように鋭い言葉だった。

応援してくれた家族や仲間たちが自分一人の死で崩壊したことなんて考えたくもない。

シリフの手から、からんとナイフが落ちた。

青銅で出来た剣。

それを見つめる。床に落ちた剣は、確かにどこも汚れていない。

つばを飲み込み、震える手で勢いをつけて刺したはずのあの時、手ごたえはあったのかと思ったが、分厚い布をかけられていて、分かるはずもない。

かといってテフィルスの衣服を脱がせてさす手間も惜しいほど、小さなタイミングだった。

血すらついていないことに気付くべきだった、とシリフは考えた。

「そちらの本には？」

黒い本の男は、相手にいうが、白い本に続きはなかった。どれも過去のこと、黒い本を凌駕する内容は見つけれなかった。

死んだ後、彼が善行として残るほどのことがなく、むしろその国が壊滅したことが小さく書かれている。

首を振る白い翼の女に、黒い本を持った男は頷いた。

更にべらべらと喋る黒い翼の男。

「殺害された方法も書いてあるけど、聞いてみ」

言う途中、さらに隣の男に、頭を軽くはたかれる。

それを見ただけで、どれだけ辛い思いをして死んでいったのかは分かってしまった。

内容こそわからない。殺され方はわからない。

けれど、黒い翼...シリフにとって悪魔が言うのもためらうほどの方法。

気付くと、天秤には黒い本と白い本、もう片方には羽がかけられていた。

見ることをしなくても、傾いたのは罪の方だった。

がたと勢いをかけて響いた音を聞いて、黒い扉が開かれる。

「違う、俺は英雄だ、そのはずだった、これは悪い夢なんだ!!」

シリフは両腕を、黒い翼の男二人に引っ張られた。

「俺は、俺の神の御意志の通りにやったんだ!!」

熱気がこみあげる。この最深部にテフィルスがいるという。

書物で読んだ紙の国は花園、白い神殿と天使たちがいて、更にその上に神がいる。

それを主張したが、扉の前まで引きずられる。もうあと一歩行けば、この中に呑みこまれてしまう。

その時、鎌を持った男と、白い羽をもった女は、同時に告げた。

「神は、存在しません」

その瞬間、シリフは蹴り飛ばされた。

落としてからなんだけど、あいつ自身に悪気はないから、この際輪廻でいいんじゃないかな」

手フィルと同じ場所へ落ちていくシリフを見送った後、その背を蹴り飛ばした、本の隣の男は天秤の上の二人に向けて言う。

扉は閉じられる。

「あら、珍しいですね、いつもは輪廻禁止なんてしつこく言うというのに」

白い翼の女が、くすくす笑いながら、頭を描く彼に向けて言った。

「うーん？うん。やっぱりなあ、そりゃ殺害数は多いし、結局自滅したことになるからどうもいえねえけど、あいつはあいつなりに頑張ったんじゃないかな？そっちの本に書かれてなかった？」

白い本は、天秤が傾いた時点で消えてしまった。

先程まで白い本を持っていた女は、思い出す。

シリフの苦勞と、国のために行ったことは、評価をしたい。

貧しい国と貧しい家族を養うための努力は、何度も白い本に書かれていた。

それらがあまりにもひどい結末になってしまった。

「...そうですね、テフィルスは信仰心熱く、善人そのものの故、自ら輪廻禁止を選びました。その代わり...」

女は、天秤の上の鎌を持った男を見た。

「ああ、この鎌ですか？痛みは味わわないけれど、結局ずっと同じ場所にいることになったのと、悲惨なものを見続けることは変わりないですよ」

鎌で首を切られたテフィルスは、地獄の最深部の熱さを感じないようにされた。

テフィルスの信仰心故に引き起こした戦争によって死んだ人間は数知れず。しかし神がいない事実と、自らの行いによって、殺戮者と何ら変わらないという事実気付いたテフィルスは、自ら、後から来る仲間の分まで苦しむことを提案した。

そして地獄の最深部で永遠に輪廻なく。

鎌で首を切ったのは、テフィルスのまっすぐな心にうたれた、天秤の上にいる彼によるものだった。

痛みはないが、首を切られても生きてはいる。

むしろ、首と胴体が離れたことで、動けもせず、煮えたぎる血の海で罪人たちを永遠に見続けるのは、善人としての自覚のあるテフィルスには、想像を絶するほどの精神的苦痛のはずだ。

また、その眼から流れ続ける血が、海となって更に血の海はかさをまし、熱くなる。

罪人の血によって出来上がった地獄という名の煮えたぎる血は、そこに飛び込んだ人間の血でますます増えていく。

「わざと国を潰したわけではないですからね。むしろ犠牲者を減らすために行ったことがこうなってしまったことですが」

「だからあいつは頭がスカスカなんだって」

黒い本を持っていた男も、納得している。

後の二人は、輪廻禁止を訴え、白い翼の女と相変わらず言い争いを続けているが。

鎌を持った男が、天秤の下で一瞬何かが光ったのを見て、降りる。

それはシリフの持っていた、毒をぬったナイフだ。

青銅で出来たそれは、切れ味がとてもいいというわけではない。

軽く刃先に触れると、乾いた毒液らしいものが指についた。

「償いは長いけれど、ここは輪廻ということで落ち着きませんか？」

天秤の上の女は静かな声で全員に問いかけた。

一体どれくらいの時間をかけて償うのかは知らないが、相当かかるであろうことは容易に想像がつく。

「賛成します」

鎌を持った男は、ナイフを握りつぶす。

毒のついてたそれは、さらさらと土に帰り、消えていった。

終

10.裁判-作者香吾悠理-

私はここに来た。

彼女彼らは私の子供であった。

名前すらない彼らは時間軸すらこえて、裁判をし続ける。

時に彼らは暴走し、時に迷い、時に怒り、笑う。

そしてついに私がジャッジメントをされる日が来た。

最後の裁判を始めます。

化粧気のない地味な人間、絵や小説を書くのが大好きな人間。

私は天秤の前にいた。

両側には、いつものように彼らがいる。

覚えているさ、忘れもしないさ、君たちの衣装だって把握しているさ。

死ぬ前の姿で。

黒い本を持った男は、大きく声をあげた。

「最後の裁判になります」

頭がぼーっとするな、彼らは私の名前と年齢と善行と悪行を述べはじめる。

色々なことがあったな、私はこに来る前に色々なことが。

精神病でめいってない日もあったけな。

とてもお世話になっている人のおかげで、絵をもう一度頑張ろうと思ったな。

作風変更になったのは、昔いた小説SNSの人の言葉だったな。

頭に内容が入ってこない。

黒い扉の前の男を見つめてみた。

彼はロングコートで丁寧口調、最初は世界観確立のためだったけれど、どんどん内容が変わっていく。

私がこれを書く時は、ニュースや人に聞いた話をヒントにしている。その時に興味のあったものも。

「とてもこの人間は罪深い、親を困らせてばかりです」

黒い本を持った男が告げる。

随分と悪行を述べられたが、それはそれでいいと思う。

神様に懺悔をして許しを乞うというのはよくある話だけれど、それは罪を告白することで、心が軽くなるからだと思ふ。

今度は善行が述べられたが、よく聞こえない。

ずっと述べられるものは全く頭に入っていない。

すでに一時間は経過した。

どこ行きになったのだろうか？

輪廻云々でまた彼らがもめている。

天秤の上の二人は私にかけて問う。

「貴方の意見を述べなさい」

そうだなあ。何がいいかなあ。

死んだ兄に会いたいな、祖父母の話を聞きたいなあ。

むしろ輪廻はどうでもいい。

そう言えば聞きたいことといえば、ある。

君たちはどうなった？

「マイキはあのあとどうだった」

私はマイキに問う。

「今、新たに子供として生きています」

マイキは、素直に答えた。無事輪廻を果たしたようだ。

今は、立派に看護師として働いているそうだ。

「早苗はどうだ。奈々子と悠木はまだ苦しんでいるのかね」

またどこからか声が聞こえてきた。

「私は、地獄に耐え続けたの。今度からは不倫なんてしないんだからね」

早苗の元気そうな声が響く。

彼女は女子高生になって、受験勉強に取り組んでいるらしい。

就職氷河期だが、君は元々頑張り屋さんだから、やれば出来るさ。

「いつまでも悠木と一緒に、苦しくなんかないわ」

奈々子の優しい声が響く。

悠木はくぐもった苦しみに満ちた声を出した。

「テフィルス、永遠にその地獄で死者を見続けた感想は？」

地獄の最下層で痛みこそないが沈められたテフィルス。英雄であった彼が自ら望んだ道だった。

「戦争の指揮をとっていたこと、後悔をしています」

テフィルスほどまっすぐな心がほしいものだね。

「リージ、輪廻をせずにずっと小説を書き続ける。どうだい？」

リージは白い扉の向こうで、来た人間たちと羽の生えた者たちに、小説を見せている。生きていた頃の小説だってヒットを生んだ、君は恵まれているよ。

「とても楽しいです！輪廻する前の退屈な時間を持て余す方々が、面白いと読んでいってくれるのは、とても楽しいですね!!」

君は楽観的だ。

「アフェルタは輪廻を果たしたらしいが、どうだい？」

性別も変わって生まれ変わった彼女は、恋人と出会えたのだろうか。

魔女として処刑されてから相当の日数が経っている。

日数というより、年数である。

「今彼氏がいるんだ」

アフェルタの隣には、彼女の恋人だった人物がいるらしい。

なるほど、奇跡が起きましたか。

何度輪廻を繰り返したかわからないが、結果的に今の時代でなら、差別はそんなにはないだろう。

「サニャ、君は家族が大好きかい」

無垢故に地獄に行きそうになった、虐待死された子供、サニャ。

実母が先に死んだ故に起こったかなしい事件だ。

「ママ大好き！パパも、ねーねも大好き！あのね、今度弟が生まれるの」

その母親がサニャの生まれ変わる前の実母かは知らないが、雰囲気はそっくりだという。

温かい家庭で、皆と一緒に食事をとる。お腹の大きい母親の手伝いを、姉と一緒にしている。

「正行はネット依存症になるなよ、自宅警備員に次はなるなよ」

インターネット依存症で引きこもりになった正行。

学歴も悪くない、最後に自分の立場が狭いことに気付いた正行は、同じネット上で知り合っていたリージに伝言を頼んで地獄に飛び込んだ。

あれからずっと時がたった。

彼は最近の二元だから、年齢はまだ低いだろう。

「まともなことしてやんよ。俺、今はまだ小学生なんだ。でも今度こそ小説家になってみせるよ。リージに負けてられないからな」

そうか、それならいい。

「辰之助は柳谷と奥さんに出会えた？」

食糧難から、己の手で息を止めた柳谷にわびたいと言っていた。

妻にいつか会うのが約束だと言っていた。

「まだ会えないんですよ。しかし時代は変わりました。自分のことを本で読んだときは驚きました。同時に、死んでいたと思っていた人が生きていたことが驚きです。昔の、おいた仲間と会いましたよ。輪廻しましたなんて言えませんけどね」

楽しそうな声が響いた。

肝心の奥さんには、まだ会えないらしい。今の辰之助はまだ十歳にも満たないという。

いつかきつと巡り合えると、ちょっとした確信があるようだ。

「シリフ、君は今何をしている？」

シリフはテフィルス暗殺をしようとし、逆にミスで自分の国が滅ぼされた。

ずっとずっと償い続けて、ようやく輪廻したという。

「マイキさんの上司をしています。俺はやっぱり医学が得意なので」

マイキと同じ職場だという。

「貴方のいいたいことは終わりましたか」

天秤の上の女が話しかけてきた。

私は頷いた。黒い本と白い本を受け取る。

パラパラとめくり続ける。

そして白い本と黒い本と一緒に、

ジャッジメントという小説を閉じた。

終

書いている時に参考にしたもの、思ったこととかを。

一応口の悪い黒い翼の人ですが、黒い本の隣の人がとても怒りっぽいです。

更にその隣の方は、やや怒りっぽいけど、まだ考え方が理性的。

四番目の人はほぼ無言。

白い翼の方は、白い本の人以外空気になってます。

閑話休題の様な、彼らの日常を挟みたいと思っていますが、それを入れたら世界観壊れるかな？
と思って書いてません。それっぽいのなら、4のリージの最後で書いています。

彼らがなぜ裁判しているのか、理由も書いてません。だって必要ないんだもの。

1.裁判-孤独なマイキ-

何か自分の世界観確率のために書いた。

なので、4辺りで終わる予定でした。

最初は死ぬまでの経緯を詳しく書いていたが、面倒になって、これが基準になりました。

死んだ理由は比較的どうでもよかったりする。

今ではあまり触れられてませんが、あまりに善人の典型的な例なので、殺害生物数ではかりにかけてます。

彼女が生まれてきたせいでは親が死んだで、殺した人の中に入ってしまうのが彼らの容赦がないです。

2.裁判-早苗、奈々子、悠木-

死因を書きたした後、リージのことを書いていたので、殺害数に自殺も含まれているので、奈々子の殺した人数がおかしいことに。

とりあえず超ヤンデレと外道男が書きたかった。

死んだ状態のままやってくるわけではないという設定にしたのは、早苗がとんでもなくい殺され方をしているので、想像したら怖かったから。

3.裁判-英雄テフィルス-

ここまで書いて投稿して、人気本を四位いただきました。

神様がいない設定にしたのは、集めたらとんでもないということですが、それを利用してみました。

なので中世ヨーロッパのどっかの国の英雄とかそういう適当な設定です。

ありがちな聖なる剣とかコッテコテの英雄にしてみました。要は神様を盲信していた英雄の鼻っ柱くじく話を書きたかった。基本的に精神が善人なので、彼自身がこの道を歩きました。鎌の存在理由はこの救済処置にあります。

と、結構適当なことを設定して後から設定づけする私のくせ。

このあと少しして、復讐医師シリフが出てくるのですが、シリフを書いた段階で死因を美容師にしたので、物語が初期と、シリフは異なることになりました。

4.裁判-物書きリーグ-

たまには頭が空っぽになるような話を。リーグの頭の構造は、重いんだか軽いんだかよく分かっていないですが、パブという場所が発表場所なので、絵描きより物書きにしてみました。

今までがよく悩んでいた人たちなので、その逆。

ただし彼自身が観察のために殺しまくったことを、悪いことだと思ってないのと、黒い翼の人たちに気にいられて、輪廻禁止となりました。

7の正行とかかわりがあるとか後で考えた。ジャッジメントされて園へ行って神殿に行くと、彼がいます。

5.裁判-魔女アフエルタ-

魔女裁判...が、当時の娯楽であり、密告すりゃすぐ捕まるので、いつか書きたいな、と。

今までが死後の裁判で変な方向いった人がいたりするので、むしろ、「何でこの人ここに来てんの？」と裁判官十人が思うような感じに。

自分が悪いことをして裁かれて死んだのに、死後ではさらりとかわされて、悔し泣きする女の子。

ちなみに彼女は恋人と裁判所で出会えて輪廻禁止を望みましたが、一蹴されました。

6.裁判-無垢な子供サニャ-

世界関係を見てると、虐待が多いので、それをテーマにしました。

彼女は死んだことに気づいてません。

子どもゆえに純粹すぎる、と、黒い翼の口の悪い人がロリコン気味。

本の書かれ方が子供なので童話っぽく絵であらわされる仕組みになっています。

真っ黒に塗り潰されているのは彼女の心情表現です。

このお父さんは、どういう心理状況だったのかというと、流されて冷たく当たるしかなかったとかそういう裏事情が。

読者様に「サニャはママに会えたの？」といわれますが、「読んだ人に任せる」と、返してます。

他の作品でも「このあとどうなるの？」といわれても同じように返してます。

7.裁判-電子の人間正行-

某大型掲示板。私はそのスレとその板にはいませんが、別の板とスレにコテハンでいます。

自作自演が多いし、実際そういう人はいますので、(スカイプで笑いながら自演してる一って言われました)どうしようもねえ。

文系は落ち着いているイメージがありましたが、いってみたら、コテハンでいる板と何ら変わりがなかったので、どこも一緒なんすね。と、それを書いてみました。

オカルト板好きなので、その影響もあって、「自分の発言がきっかけで相手死んでたらどうする？」と変な発想になりました。

しかし彼が間接的に殺したといっても、彼が全てではなく、全て悪いことが重なって追い打ちとなったのが、日本人の方。

特に関係なく自殺しているのが4で登場したリーグです。リーグは相変わらずな性格しています。

正行は死に方が潔いといわれました。

毎度ですが、名前は一発変換できる名前にしています。

寒い寒いと連呼していたので、あっちいってもらいました。

世界観がラノベがどうの書いてますが、私自身実はラノベって呼んだのは一度しかなく、しかもそれが「そーゆー」とか「とゆーのは」など、軽くイラッとするような日本語崩壊された書き方なので、本物のラノベがどういう描写のされ方か分かってない。

8.裁判-約束と裏ぎりの辰之助-

死因が老衰なのがなく、丁度その時に近所の方が出版社で出した駆逐艦隊の本を貰っていたこと、その時戦争の心理の本を購入しまくっていたこと、特に蒼龍艦長柳本柳作さんが大好きだったことがあってこれにしました。

名前はお父さんのおじいちゃんの名前を借りてきました。

近所の方に本を貰った際に、「柳本柳作さんが大好きなんです」といったら、「ああ。あの人ねー...」と遠い目をしていたので、内容見て後悔しました。

彼は柳本さんの最期と蒼龍の最期を見ていたのです。

蒼龍の描写は、彼の書いた本を参考に書いてます。しかしこの辰之助の艦隊は架空です。

戦争の心理は大変好奇心をかきたてられるが、人によって様々なので、本当になんと表せばいいか。

で、これは二月初旬にほぼ出来上がってしまいが、本を、泣きながら読んでいたのもあって、公開停止するかで迷いました。

祖父に戦争の話を聞きましょう、というのが小学生時代ありましたが、当時は興味がないのと、祖父があまり話さないのが最近になって、両親の祖父がなにをしていたかを詳しく知りました。公開理由は、何人かに読んでもらって、いんじゃないかといわれたので行きます。

近所のその方には絶対に見せられません。

辰之助の元になった曲・UNDOをどうぞ(平沢進/人間食っちゃった) ライブVerスケルトン・コースト公園(平沢進/CDの方にはない、語りが入る所は辰之助の口調のまま)

母方の祖父→医療関係で海外に。腸がはみ出した人を詰め込んで縫ったけど駄目だった、と、祖父は悲しそうに語っていたそうです。

父方の祖父→安く看板描いてばかりで祖母が怒っていた。

9.裁判-復讐者シリフ-

結局9までずれこんだ。

ちょっと初心(テフィルスあたり)に戻ってみました。

最近の黒い本の隣の人がレギュラー化している。

シリフは元々サニャあたりに考えていた、のですが、自分自身テフィルスの死因が病死にしたことを変えられず。

テフィルスの他国の評価がすげえことになっているとか書いた覚えがあるので、その人になってもらいました。

しかもこれ書いてる最中、「絶対に検索してはいけない言葉」というものを見ていたので、シリ

フの兄弟、家族はああいう結果に。

青銅時代なので相当昔です。鉄？何それおいしいの？時代です。

テフィルステフィルスの聖剣らしきものって鉄じゃなかった気がします、今更読み返すのが怖いです。

青銅を握りつぶせる握力を持つ鎌の人。

10.裁判-作者香吾悠理-

完結作品。

彼らがあのとどうなったかのおまけ話。

今の時代で輪廻した彼らへの問いかけでした。

長々と付き合ってください、感謝です!!

ありがとうございました!!



ジャッジメント

<http://p.booklog.jp/book/41725>

著者：香吾悠理(エビル)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuri15/profile>

HP：<http://yuuri15.huu.cc/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41725>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41725>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.